

---

# 泣いた死神(二次創作倉庫)

蜜八チ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泣いた死神（二次創作倉庫）

### 【Nコード】

N8232L

### 【作者名】

蜜八手

### 【あらすじ】

「ソウルイーター」「刀語」二次創作小説用の倉庫。

main<<...soul eater（略/魂喰）ソウマカ中心。  
心。

sub min<<...刀語（略なし）七×咎、右×否中心。

notBL!NL-only.

## 説明書き

説明ですよ奥様！

- ：) ここはソウルライター二次小説用の倉庫です。
- ：) 現在のメインはこちら

ソウマカ

その他etc...

- ：) そのうち昔書いてたやつもアップ予定？
- ：) その内他のも増えるかもー
- ：) ちなみに基本オリジナルが進まないときに更新なので
- ：) 更新されたら「あー頓挫してんだな...」
- ：) と思っってくださいまし...
- × (あんまり好ましくない状況ですがね...)
- ：) 下のタイトルは予定です(いつもタイトルに悩むのでストック  
です)

title...

曖昧な自殺意志

Spike heels<sup>ヒール</sup>

共喰い(ソウマカ+キッド)

無謀な話を始めようとすると思つて彼は笑う

「いーね、いたつてクールだ」とそう言うから

ね、だから、なんとかなるかと思つてしまった

無謀を勇氣と履き替える事はなんと浅はかな事であると

title:共喰い

(ソウマカ)

「マカ、おい、マカ、」

呼び続ける声もつつすらと雑音に混じってゆくのを感じた。  
体から血が流れる感触がしないのは体温と血の温度は同じだからだ  
ろうとこの場では見当違いな事を思っていた。

起きなくちゃ、彼が死んでしまっ、と腕に力をこめて足もふんばり  
を利かせるけれどただの小さな震えになるだけだった。  
切り裂かれた胸も頭も顔の傷もどれも鈍く、熱く痛い。  
そしてやたらと眠かった、それは多分一度眠ればどこまでも眠って  
いけるんじゃないかと思えるくらいだ。

いつもクールな彼の呼ぶ声がだんだんと小さくなってゆく。  
顔もぼんやりとだけれど見えた、いつものクールな彼に冷や汗。  
ごめん、ごめんねソウル、ソウルをデスサイズにしたかったよ、と

手を伸ばそうとするけれどそれも叶わないから、悔しくて涙がこぼれた。  
眠りに引きずられていく、敵は彼の背中の後ろのほうでにやりと笑っている、彼を置いていけない、やだ、やだ、と思うがそれには勝てなかった。

彼女がゆっくりと神経から魂が引きずり出されるのを感じた、死だ、彼女は直感的に悟った、彼が口を大きく開いて叫んでいた。

「死ぬな、マカ、やめろ、目を開けろ、マ、カ、．．．」

汚くよだれ垂らした太陽がさんさんと日を照らす。  
ソウルは口をもぐもぐと動かしてベンチに腰をかけて空を見上げていた。

雲の伸びきる心地よい昼下がりで木漏れ日がなんとも心地よい。  
その彼の目の前では下級生が目の前のバスケットゴールに食いついていた。

入らない入らない、入った、とはしゃぐ姿は今の彼には太陽よりもまぶしかった。

ソウル、呼ばれた声に振り向くと死神Jrのキッドが立っていた。  
良い天気だな、と言って隣にゆつくりと座り込む。

ああ、と言ってポケットからチューイングガムを差し出したらキッドはありがとうと言って口に頬張った。

イチゴ味だった。それを見やっからまたソウルは空を見上げる。

「最近はどうだ？落ち着いてきたか？」

「ああ、そうだな。葬式に来てくれてありがとな」

「当たり前だろう、そんなの。」

キッドは悲しそうに笑って、ソウルと同じように空を見上げた。

透明な青に白い雲が心地よく、見ていれば引きずりこまれそうにも思えた。

ハトが何羽か飛んでいて目の前の子供達のはしゃぐ声が聞こえて皮肉にも平和そのものだった。

キッドは思う「悲しすぎる」と。

（死神Jrから見れば彼らはでこぼこではあったがキツチリカッチリと中のいいパートナーだった。

優等生のふりして所々空回る彼女にいつも手を差し伸べる彼の表情はいつも「信頼」で、プライベートな話だと「愛」があった。

何があつて結局最後にはいつだってキツチリカッチリ息の合う二人を見ているのは彼にとって気持ち良いものだ、それと同時に二人が好きだった。

この現実リアルがなければ良いと思うほどに。）

「先日な、マカの荷物親父さんが持って行ったんだよ」

「そうか・・・デスサイズさん、葬式ではへだれてたな」

「持っていったときも号泣して大変だったんだ」

「想像がつかなく、なんとなく」

横目でソウルを見ると彼も少し笑ってキッドを見ていた。

だから俺、形見にこれ貰ったんだとこそごとズボンからネクタイを取り出した。

あ、と言うとソウルが笑った。

白黒のネクタイは彼女のお気に入りです。トレードマークでもあった。

キッドはふいにマカの笑顔を思い出した、ちよつと涙がじわりと染み出た。



目頭を押さえる彼をみやりながらネクタイをポケットにしまう、また空を見上げる。  
吸い込まれそうだと。

「俺は大丈夫、後々のことで忙しくてへこんでらんねえんだ」  
「そうか、うん、その方が悲しむよりは全然ましだな」

ブラック スターもうるせえし、と言うと同感だとキッドも笑った。  
世界は至極平和で何も変わらずただ目の前の男が不幸にあつたとい  
うだけだ、世界が残酷に思える。  
少し位彼のために悲しみにくれてくれたっていいのに。

ソウルはふん、と笑うと「大丈夫だよ」と言った、目が合ったらこ  
っちも笑った、「そうだな」と変に入っていた力を抜いた。  
彼の中ではもう彼女は過去形なのだとし寂しくも思えたけれど、  
それで良い、とキッドは微笑んだ。

いづらか世間話をしていると風が冷たくなってきた。  
太陽はそろそろ寝ぼけ眼で空をピンク色にもオレンジ色にも青にも赤にもしていた。

黒猫が飯を待っているから、とソウルは立ち上がる。  
ああ、そうだな、とキッドも立ち上がった。

まだバスケットをしていた子供達ははしゃいでいて今度は3on3をしていた。

一人の女の子が「バスケット苦手」と困っていたのをソウルが遠く見つめいたのをキッドは見た。

やはり、彼は。

「ソウル、もし良かったら俺の家に来ないか？部屋はたくさん余ってるし、あの家は猫と二人じゃ広すぎるだろう？」

「ハハ、大丈夫だって。キッドは心配性すぎるだろ」

だけど、と口ごもる彼にソウルは「んー」と一度空を見上げてそれからキッドの隣までまた歩く。

俺はまだ一人じゃねえんだ、と彼は言った。

猫のことかと思いい「それはそうだが」と言おうと振り返った。

目を見開いた。息が一瞬止まる。

彼が見たのはソウルがべろりと開いた口の中だ、その中にはぶにぶにと白い魂が彼の口の中に納まっていた、そしてキッドにはその魂に見覚えがあった。

(…嗚呼)

あんぐりとキッドも口をあけた。

その様子を見てソウルがまた口を閉じて片方のほっぺたにそれを押し込みもぐもぐと口を動かした「食べねえんだよな」と彼は言う。

「吐き出しちまうと成仏しちまう、飲み込んだら最後、腹で徐々に消えちまう、どうしろってんだよなまったく」

(嗚呼)

横のバスケットコートでバスケットを苦手だと言っていた少女をみやりながら膨らんだ頬を引っかいた。

その顔は笑っていた、Mrシユタインのようなイカレた笑みだ。

「じゃーな、と言ってまたくると背中を向けた彼をキッドは呼んだ「ソウル」、振り返った彼は唇に人差し指を立てて「しい」と言っ

た。  
そしていつもの景色に同化していつて、彼の姿が見えなくなって、それでもキッドはポカんとその場に立っていた。

はしゃぐ子供達は酷く平和で日常的で、景色もまた酷く平和で日常的で。

彼はベンチに倒れるように座った。

そろそろ目の下にクマを作ったつきが現れる事だろう。

いつもと変わりなくめぐるこの世界は残酷でも最高でもなくただただあるのだとキッドは空を見上げた。

共喰い(ソウマカ+キッド) (後書き)

昔の携帯サイトから移植。

マカちゃんが好きすぎて好きすぎて食べちゃったよってお話。  
これ位狂ってくれたっていいじゃない！

分裂 (魂喰・ソウマカ+ブレア)

幸せだと思えたんです。

(英語じゃ「I felt happy」、but)

t i t l e : 分裂 ソウマカ

なかなか美味しいじゃん、と言うと本当？良かった、とマカは返した。  
オムライス、新作で卵の中からチーズが中からトロリ、なかなか  
お手前で。猫も話しに乗ってそう言ってみた。

暖めたオニオンスープ、ベビーサラダのうえにはサーモンが乗って  
いたけれどどっかの猫に食われてただのサラダになってしまった。

仕方ない、と（けれど初めからわかっていたことだ）味のないサラ  
ダにもう一度サ・モンを乗つけた、彼女の嫌いな生もの、ソウルが  
少し笑んだ。

部屋のインテリアに似合わないおこたに入って雪の振る外を見て「暖かいね」とオムライス。  
オニオンスープから湯気が上がる、猫がさめるまでそれをふうふうと息を吹きかける。猫舌なの、と一言。ベタだけれどね。と付け加え。

テレビでお笑い番組がやってる、たくさんの人たちの笑い声と、芸人のつつこみの声、あははやばいよー、と彼女も笑った。

男は空っぽになったお皿を一塊にして、それから悔やみながらおこたから抜け出してそれを台所へもってゆく。

冷たい水を張って、その中に食器を中にIN。それから、そのままポットに水を入れてスイッチIN。

ぽかぽかの足がだんだんと温度が下がってゆく、「こたつー」と言いながらおこたへ戻ると白い手に、みかんの実。剥いた奴。

「食べる?」

ありがと、そういつて指ごと食ってやった。

彼女は笑ってた「キャア」と笑い声を立てて。



「そんな幸せが、あつたのにねえ」

猫は露出の多い服に、しろの毛皮を上羽織ってこつこつと高いヒールをコンクリートに響かせてクイ、と帽子を指で上げた。

目の前の怪物に視線を向けると哀れみに眉をひそめ、唇を軽くかんだ、もうあのサーモンサラダは食えないのか、軽く鬱にでもなりそうだ、お前が？とどっかの人に言われるだろうけれど。

夜の暗闇を今にも眠りそうな月がぼんやりと照らす、気合が足りないのかうすぼんやりと。

洋式のこの町は石畳の道で溝にヒールがつっかかりそうで怖い、ついでにもうひとつ言うと石畳は好きになれない、それよか安っぽいフローリングの方が良い、床の話し。

けれどフローリングは冬は床が寒い（石畳もそうだが）、だから暖かすりっぱをパタパタ鳴らしてた、私の肉球も寒くていたかった、スリッパの音は石畳ではぱたぱた言うのだろうか。

けれど月はとても似合う町だ、けれどあの部屋の窓から見た冬の景色にも、夏の景色にも、春にも秋にも、朝にも夕方にも夜にも昼にも適いやしない。

それに幸福なおこたも何もないし彼女の剥いてくれるみかんもないのだ。

何もかも劣るのねえ、彼女の頭に、テレヴィジョンの音が、笑い声が響く、幻聴だった、彼女達の思い出の走馬灯なのだろうか。

今から消える、彼らの。

「ねえ、どこまで狂ってんの？まだ生きたい？ねえマカ？」

猫は軽く微笑んで、爪を舐めて、指を口にふくんだ。怪物の目に彼女が映る。らりった声で「さあねー」と聞こえた。

幸せがそこに確かに存在して、私たちはそれを大事に大切にたべ貪った  
過ぎる過去を幸せで彩る、退屈で繰り返される日常は心地よかった  
というのに

「さあねさあね？もう生きたいのかなあ、死にたいのかなあ、あれえ、ああ、もうわかんないや、だから彼に聞いてよ、」

「んじゃあソウル、出してもらえない？」

「どうだろう、出てくるかな？あいつクールじゃん、クールでハードソウル、なんてくだんない」

きやつは、マカは見開いた目で釜を振り回してそこらへんのゴミ箱を切つてぎやはぎやは笑うのだ。結っていたはずの髪が片方ほどけてる、はいてた靴が片方脱げてはだしになってる。

人間落ちるとこまで落ちるもんだ、猫が赤く赤く霜焼けた彼女の足の指をみやつた、彼女ならこんなことしない、優等生マカちゃんはこんなことできるわけがないのだ。

らりつた目に目の下のクマ。月の光ぼんやり白い肌。ぶん回される何も答えない彼女のパートナー。

猫が噛んでいた指を抜いた、噛んでいた爪が割れた、みかん食べた、割れた爪に血がにじんで。

「マカあ、あのね、私まだあの部屋取ってるの、おこたもみかんもそのまんま、キッチンにはソウルのエプロンもかけてあるんだ」

みかんみかん。おこたといえはみかん。冬といったら鍋なのになんで私達オムライスにサラダ、オニオンスープなんて飲んでたんだっ

け、美味かったけど。

そんでさあ、そのことに気づいて今度皆で鍋にしようねって言ったじゃん、私は蟹が食いたいって言ったじゃん。

「戻りたい？戻りたくない？」

「しらなあい、そんなこと好きにすれば」

「好きにすればって、あんたも現代っ子だったんだねえ、好きにすればなんてむかつくねえ、デート先どこ行く？好きにすれば？みたいなさあ」

猫が爪を研ぐ、マカが鎌を強く握る、彼は何も答えない。

(いや、答えたくないのだろう、運命を決め付けたくないのだろう、分かりきっているのに)

月に丸く曲線を描く鎌が光る、狂ってるくせによくもまあ魔女狩りの物なんて握れるもんだ。猫が目を見据えた、ヒカル、ヒカル。

「…戻りたいね、蟹が食いたいや」

零した本音、彼女がコンクリートをけった。

彼女のブーツで温度は伝わってこないが彼女と一緒に肉球でおこたを目指したあのフローリングと同じくらいつめたいのだろう。

そして、いつも彼が先に部屋で待っていてストーブつけて待っていてくれておこたの電源も入っていてちょうどいい具合にぬくまっているのだ。

そして彼女は朝一番の「おはよう」を言って彼も「おはよ」と笑う。

そんで、そんで、私が彼のひざに乗って、足をぬくませて、彼女はその朝一番のキスをする。私は黙ってそれを幸福に見やっっているのだ。

みかんの味のするキスがあつて、ぬくぬくのおこたとソウルのおひざとマカのアツ顔があるあの朝とそれから窓からの風景。

そんな幸せがあつたのにねえ。

二人は愛し合っていました、朝一番のキスが、幸せだったのです。そしてみかんが、彼らの間を取り持っていました。

冬の景色、暖かなキスにおこた、猫は幸せのお家うちにあくびをひとつして眠る、少年少女はオムライスに幸福を祈ってハートの形にケチヤップをのせる。

分裂 (魂喰・ソウマカ+ブレア) (後書き)

昔の携帯サイトから移植。

狂ったマカちゃんを書くのが好き好き。

ソウル君がへたれてるけれども。

きっとこの二人の幸せを一番祈ってるのはブレアだと思っんです。



## n e m b u t a i (魂喰・ソウマカ)

人って馬鹿馬鹿しくも意味を考えてしまうモノだから  
だから苦しいって言うからそれに手を出しちまう

ネンブタール  
n e m b u t a i

どうか手の届かない安全な場所に

ネンブタール  
t i t t l e : n e m b u t a i

魂喰でソウマカ

そうね、そうなの、私は優秀性じゃないし誰だって救えない。  
それって意味のない事じゃない？むしろ私って役立たず、ね、そう  
なのね、ああ、ああ…。  
だったらこうなったって良いじゃない、むしろこうなった方が皆の  
ためでしょ、ねえ、ねえ。

彼女は真っ青な顔して白く滑らかな湯船に体を寄せて、そうボソボ  
ソと呟いた。

いつも笑顔をこぼし、感情をストレートに出す彼女らしくないその  
顔、表情。そうして弱音。

そういつもの彼女からは思えない、ソウルはただ口を閉ざしてそん

な彼女乃前の前に膝をつく。

いつものツインテールは解かれて、彼女の白いTシャツにばらばらと零れていた。

唇も青くて、袖からのぞく肌も青白くって、目がうつろでらしくなくて、そうして彼女の手首から流れるそれが哀しかった。

ツルツルのタイル、それに赤い血が残酷にも奇麗に滑って流れていく。

痛々しい手首は今タオルによってふさがれている、彼は思いっきり力を入れていた。

だってこれ以上彼女から、これが流れてほしくなかった。

気持ちいい白い浴室が彼女の血によって一気にホラーに変わる。

彼女は静かに狂ってる、そう、青い唇から吐かれる毒。一步一步死に近づく彼女は、自分を言葉で貶める。

ねえソウル、あんただってそう思ってたんじゃないの？

「アホ、バカじゃねーの…」

ソウルはそうとしか言えない。

彼女の目を見た、視点の合っていないジャンキーみたいな死んだ目。口だけを器用に歪めて嗤う。優しいねえ、彼女は毒を吐く。

「私ってさ、結局できそこないなんだよ、運だけの良いラッキーガール、チャンスを100%使いきれない阿呆の子」

「俺は、おまえが天才そうだから、パートナーに誘ったんじゃないねえ

よ  
「そうかもね、そうだとしよつか。それでも私は、みんなに頭が上  
がらないんだよソウル」

彼女は顔をゆっくりとあげた。

真っ青な顔だ、そして生気のない顔、けれど死んだ目に可笑しなギ  
ラギラとした光だけが泥沼の表面みたいに光っていた。

逃げだしたい、この場からこの空気から。

「死ねばいいのに」

彼女はそう言って、ゆっくりと瞳を閉じた。

そうして、まつげが震えて…彼女が、嗚咽を漏らす。

「違う」

目の端から涙が流れて                    ねえ、ソウル、違うの、違うの。彼女  
は歯を食いしばった。

「違うの、生きたいの、生きたいんだよ、嗚呼なんだってこんな事  
したんだろあたし」

彼は表情を崩さずに嗚咽をこぼし、子供みたいにヒイヒイ泣く彼女  
を見つめていた。

ボロボロと零れる涙が、頬へ落ちて、涙の筋をいくつも作っていた。

「ごめん、こんな事しちゃダメだよ、ごめん、違うの、迷惑、か  
けてごめん…あたし、死ねばいいのに、でも死にたくないよ…我儘

だ、私何言ってるんだろ、本当にくそだ、くそ…」

支離滅裂。何を言いたいのか彼女もきつとわかつちやいない、ただ頭に思いついたことをたらたらと口から流しているのは明白。

それでもソウルは彼女の言うことに口を挟まなかった。

頭の中じゃ薄っぺらくて誰でも言える優しい言葉や、慰めるための表情だって考えだって浮かんでる。

けれど今は掴む手は冷たくて、流れる血潮は暖かくて、掴んでいたタオル越しにそれを感じていた。

「…マカ」

彼が声をかける、それでも彼女は嗚咽を止めず、恨み事のような毒を言い続ける。

彼の言葉なんて聞かない、そんなの分かっていた。

「…マカ…」

そう、彼の言葉なんて彼女に響くのかも、よく分からない。

このやり取りだってもう何度も繰り返しているのだ、彼女の手首の傷はもう重なるほどだ。

「…苦しいなら、もう、やめようよ…」

強く握る手、タオルに染みる血が、端からこぼれて、白いタイルに点を作る。

彼は白いタイルを見つめた、白いタイルを犯すこの赤黒い血を彼は恨めしく見ていた。

(彼女は彼に住む鬼のお仲間にもれかけていて、それでも彼女は気丈に笑っていたというのに)

(それでも人は何がスイッチになるかわからない)

(時折こうして彼女はそれを吐き出すけれど)

(…そうしなきゃいけないのは、わかるけれど)

だけど、だけど、と終わらない堂々めぐりに彼は歯を食いしばる。泣くわけにはいかなかった、涙を見せたく無くないから彼は歯を食いしばり、彼女には意味のない言葉を紡ぐだけ。

「俺は、それでもお前というよ」

そう、意味のない言葉

「お前に俺はついて行くから」

彼女はその言葉を聞いて、言葉を止めた。

彼女の長い金の睫毛が一瞬ではあったが震えたのをソウルは見た。そうして、またあの気味の悪い笑みを浮かべて、涙を一粒二粒浮かべてこぼす。

は、は、は・・・乾いた笑い、風呂場にそれは響いて彼は眼をつぶる。

「いいよ、嘘つかなくていいよ、もう、いいよ……」

そう言って、ソウルの言葉はまた、意味をなくしていく。

彼は目の前の狂った玩具のようにひたすら自分を嘲笑いながら涙をこぼすこの可哀な女を、抱きしめた。

**n e m b u t a l** (魂喰・ソウマカ) (後書き)

リハビリ作品。

うーん、リハビリ…そう、これはリハビリなんです！（こら  
弱ったマカちゃんも好きよ。

ネンタール  
**n e m b u t a l**

動物用麻酔。オーストラリアの安楽死支持グループが「自宅のキ  
ッチンで作れる自殺薬」として『**n e m b u t a l**』の作り方をビ  
デオで制作した。

自殺薬はオーストラリアでも禁止されている。

## 花葬（魂喰でソウマカ）

花束にはとびきりのリボンを

それが別れの饑別だとしたら 尚更

t i t l e : 花葬

柔らかなベッド清潔な白いシーツの上、華奢で傷跡が残る足を彼女は延ばしてシーツを足の指でつまんだ。

その足をソウルは仰々しく手を添えてベッドから下ろす。

優しいだけのキスを足の甲に落とす。

それ以上はできもしない、彼は足をベッドからゆつくりと下ろすと濡れたタオルで足を拭いた。

足を拭ったタオルには砂と血が、その白を汚していた。

彼女は甲斐甲斐しく世話を焼くソウルを見ずに、風で膨らむレースのカーテンを見つめていた。

白い部屋に差し込む白い柔らかな明かり、揺らぐカーテンが壁に揺らぐ影を生む。

部屋には彼がかけた、分類すら分らない曲が流れる。

ジャズなのか、それともバラードなのか、彼女には分からない。

どちらにしたらってこの曲は哀しく陰険だった。



女の声が泣く、朗々とした曲。

そういう考え事をしているうちに、彼が用意した絆創膏が足に貼られていた。

可愛らしいキャラクターが描かれていて、こちらを見てニコツと笑っている。

「ねえソウル、もしもの話よ」

なんとも可愛らしくなった足を掲げた。

ソウルは眉を一つ動かして、反対の足を少し力任せに引っ張った。

「私のお葬式はね、花に囲まれたいの、それとリボン」

「乙女チックだな、くだらね」

目も合わせずに、彼女の足の世話をせつせと行う、彼の表情は無表情。

世間話でもしているかのような軽々しさ。

可愛らしい絆創膏に手を伸ばす、少し押すとやはり痛かった。

「くだらなくないよ、夢じゃない」

「なんつう後ろ向きな夢だよ、前向きつぜ、前」

またペタツと可愛らしいのが貼られた。

「ソウル」

「マカ、俺は本気だ」

「知ってる、だから言ってるの」

ソウルは顔をゆっくりとあげた。  
その顔は、無表情だ、しかしマカには分かっていた。

彼の瞳の中でカーテンが翻る

「だからなの」

そして日の明かりを背にして、知らない表情をする女がいた。  
なんて陰険で、悲痛なのだろう。自分にはこの曲と同じ位知らなかった。

動物には自分の死期が分かるという

猫はそれを感じれば家族から身を隠すという  
象は群れから離れていく

そうだとするのなら 人間も動物で私も動物だということだ  
ねえそれは悲しいことじゃなかったよ 私にはだけれども

可愛らしい絆創膏の下には可愛らしくない、人為的な裂け目。

わかっていて、それともこれは勘違いかもしれない、けれど分かるのだ。

「ソウル、今だから言うの。これは悲しむ事じゃない」

「やめてくれ、縁起でもない」

「そう、縁起でもないね」

彼が聞きたくないのは知っていた。

それとなくこの話を切り出すと、彼は上手にこの話題を流したものであるから。

それでも話す価値があるのかと聞かれればどうなのかは彼女には決められない。

「でもね言いたいだよ、誰でもないソウルに。ね、my part ner?」

そうわざと茶目つけに微笑んで言う。上手くほほ笑めただろうか。

彼はそれを聞くと、無表情を崩す。

眉をひそめた、そう困った表情は彼には珍しい。

でもいつも言いくるめるのは私で、彼は私の意見を通すのは決まっていた。

だから、ベッドの下に居る彼が腕を伸ばし彼女の腰に腕を回して抱きつくだけだ。

顔を抱いた腰にうずめる。髪に触れた、少し硬めで艶のあるシルバ―ヘッド。

この関係は私には心地よかったけれど、そういえば彼にとってはど

うだったのだろう。  
独り言をつぶやく。

死んだ棺桶にはたくさんの花を敷き詰めて私は横たわる

眠る私は貴方をお願いがある

とびつきり上等なりボンを結んだボリユームのある花束を

それをベッドに忍ばせたなら最後に別れのkissを

そう、これは本当に私の我儘で、言わなきやいいことだ。  
部屋にかかるレコードは相も変わらず辛気臭い女の歌が流れる。

「…わかったよ、マカ、おまえがそうして欲しいなら」  
「ん、ありがとう」

彼が腰から顔を上げた。カーテンの影が、彼の顔にかかる。  
手が彼女の頬に伸びて、そのまま肩を押してベッドに倒した。

胸に顔をうずめる、そして体で彼女を抱きしめる。  
マカは嫌じゃなかった。

「なら、呼吸をしている間は俺のお願い聞いて」

「できる範囲なら」

なんて私は、嫌な人間なんだろう。

マカはこの、情けない顔で自分を求める男を見た。

誰が見てもこの魅力的で、奇跡的にパートナーとなれたこの少年を。

カーテンが頭上でまだはためく。

はためくカーテンの隙間から、良く晴れた空が顔をのぞかせている。気持ちよさげに雲は伸びて、自分たちのこの行為が場違いに思えた。

こんな事、言わなければ良いのだ。

言えば彼は、彼女が死んでも彼女を忘れることはできないだろうか。

死が近づいているのを知っている彼女がそれを言うのは、酷い我儘で、浅はかだ。

そう、だからこそ彼女は言ったのだけれど。

彼が頬を手で挟む。そして、自分にキスが降りそそぐ。

マカは幸福の上で少し胸が痛むことを、丁寧に隠す。

「マカ、キスしていい？」

マカはひとつ頷いて、心の中で謝罪する。

この愛しい少年をマカはきつと死んでも忘れられやしないから、彼女は涙を流した。

花葬（魂喰でソウマカ）（後書き）

悪女なマカちゃんとのせられたソウル君。

でもマカちゃんの考える悪いことってまだ可愛い気がするのよ。

残された合鍵（魂喰・ソウマカ+シュタイン）

周りに人はいるけどそれがなんになるっていうの

こころの隙間埋められないのに



NO.1 私はひとり (BGM / 金魚花火)

強さを求めた結果がこういうことだ、博士は相変わらずへらへらと笑って煙草の煙を吸った。  
煙草の先が赤くチリチリと燃えて灰が落ちた。 . . . ああ。

教室はマカと博士の二人だけで、あの例のアロマキャンドルの置いてある部屋にいたのだけれど今日の部屋の匂いは人をいらだたせる臭いじゃない。

少し煙いけれど落ち着くほんのり甘い香りが漂っていて、暗い部屋に灯るろうそくの火が綺麗で、マカは横になりながらそのろうそくを見ている。ろうそくの火は揺れる、少女の瞳に映る火も同じように揺れる。

後ろで煙草を吹かしながら扉に背中を預けていた博士が頭に刺さるねじで煙草の火を消した。ジリ、と音。

「落ち込みやすいのは遺伝子のせいかもね」

「パパもママもきつと関係はないです」

「少なからず先輩の血は関係しそうだけどね、なぜなんだ、なんでそんなに落ち込んでいるんだい？」

「誰も悪くないです、なぜもないです、もしかしたら私が悪いかもしれませんがそうじゃないかもしれません」

この部屋の匂いは濃くも薄くもなく最高のバランス。この閉め切られた部屋には窓から入る白い日光が入らないのが彼女には幸いだっ

た。  
Mrシユタインが珍しく気を利かせた枕にしているこのクッション

のさわり心地と寝心地は最高で眠気が精神を引きずっている。

「この部屋で寝たら死にますか二酸化炭素中毒とか」と聞けば「死にたいの？なら解剖させてよ」と本気かも分からないブラックジョークを飛ばす。

彼女の声は覇気も明るさも暗さも絶望もない。らしくない淡々とした声に彼は煙草を吹かした。

悲しむ事も喜ぶ事もできず、からっぽのような目をした彼女をこの部屋に連れ込んだのはついさっき。

彼女は「胸のあたりがざわざわするんです」と呟いた。無表情の顔にそそのるものがあったがそれは彼がサドだからか、彼女に潜在的にあった魅力か。

この部屋の香りのコンディションは最高、  
ストレスに効くというけれど彼女にはどうなんだろう。

ごろりと仰向けになった少女の髪がパサリと床に散らばった。ポニテールを解く手は普通だったけれど彼女の魂がゆらゆらと揺れていたのが見えた。

いつだってまつすぐ直球にぶつかっていく彼女の疲れなのか隠しておしてきたものが前に押し出てきたのだろうか、不安定に揺れるそれはろうそくの火のようだ、ふつと息を吐きかければ消えてしまいうそうな。

男がひとつ短すぎて蝋燭台からロウが垂れてきたキャンドルをふつとけた、それでも部屋はほんやりと明るい。

「眠たいです、先生」

「なら眠りなさい。死んだって生きてたってどっちでもいいでしょう？今は」

「先生は私が死んでも良いんですか？」

「君が死んだら死体解剖ができるね、まあそれは冗談だよ。これぐ

らいで死ぬたまじゃないでしょう」

シユタインがどこからか持ってきた毛布を投げた。その毛布の軽さも暖かさも感触もなにもかもが柔らかかった。

毛布にくるまって顔を隠した。散らばった髪だけが毛布からはみでていた。

博士が音を立てずに扉を閉める。人は強いストレスがかかると三大欲求のいずれかを行うもんだ、と以前読んだ書物を思い出した。本の題名はなんだったか、そんな事は今はどうでもいいこと。解決法はかかれてはいなかったはず。

白衣を翻し、廊下を歩く。きっと彼女はすぐに眠りにつけたことだろうと部屋をあとにした。

この部屋のコンディションは全て最高で、ぼやけた不安を一気に掻きあげる



部屋に残された少女は夢うつつ、けれど確実に眠りに落ちれないでいた。

漠然とした恐怖が眠る事を許さずにおいて、自問自答を繰り返すこの時間は退屈であり不安であり耐えがたく辛いものだ。けれどこの匂いのせいか、いつもよりはまだ胸の中が軽く涙もでるほどじゃない。

「男と女でいなければずっと一緒なのかな」

ポツリと考えが口にて、彼女は豆のつぶれた自分の小さい手を見た。

以前彼と喧嘩して波長が合わなくなったときにできた火傷の跡がしつかりとついている、強くなる事に不満なんてないよでも。

毛布から顔を出した、ろうそくの火が見えて綺麗だと思った、今なら寝れるかもしれないと彼女は枕を頭でもぞもぞと直した。

「死ねますか」

彼女が言った言葉だ。

ふつと出たその言葉に自分自身驚いたのは「死にたいの？」と返された時「どうでもいいです」と答えそうになったからだ。

どんだけ自分疲れてるんだろう、落ち込んでるんだろうとため息を吐いた、いつもは爽快・誠実・真面目の優等生三連チャンコンボを信条にしている程なのに。

こうゆう時ばかりは周りにいる人々も無意味でうざったいだけで、ただ休息が欲しいだけだ、心に釘を打つ。

彼女はふと横切る想いに、彼への執着が、愛が、何よりも怖かった。目をつぶる、瞼の裏にもろつそくの火がある。

変なアドバイスも彼女の考えを明確に言葉にする口もいらぬ、ただ心を宥<sup>ナグ</sup>めるモノが欲しいだけだ、きつと、そうだ。

”愛”はこんなゆらゆらの火みたいに、足元の無い不完全なものだと。温めもするが、燃やされもするものだ。

(好きだとさえ、気付かないでいれば)



## 残された合鍵(2)

残されたまぬけ面も

残した優越感も覚えすぎた

NO2残された合鍵 (Bgm: Cherish / 大塚愛)

黒いベルベットのソファ、黒い壁に赤い天井。  
モダンなこの店のステージで歌う女の声は甘く、軽くバックのピアノともよく似合っていて。

ソウルはカウンターに座り頬杖をついてその曲を聴いていた。テーブルに置いた酒はお任せで綺麗なグラデーシヨンの色でコップの縁につけた塩がキラキラと光っている。

ここは暗く所々の間接的な光が丁度良く、反響する音が彼の皮膚を振動させるのが心地いい。酒をあおった、注文がはいったのかシェイバーを振る音が聞こえた。

ひとつ解せないのは、ここは匂いがイマイチだった、酒と煙草とそれから、端々に見える男と女の「だましあい」。紫の光でも照らさ

れてるのかと思うほど彼らはオープンで、しかも見られるのを好んでいるからタチが悪い。

目の前を通り過ぎた笑顔の赤いドレスの裾をヒラヒラさせたスタイル抜群の女が隣の汗臭そうな男に尻をもまれていた。それでも笑顔だった彼女に「商売根性だな」と彼はまたステージに目をうつす。

「本日はどうなさいました？ソウルさま」

バーテンダーが手を拭きながら尋ねてきた。それから綺麗なピンクの酒の入ったグラスをコトリと置く「サービスです」と。

「ん？なにが？」

「珍しいお顔をしていらっしやる、そう、何かに沈んでいたような」

「沈みたいねえ。確かにそうかもなあ」

ブルーのシャンパンを一気にあおった、ここでは一気したって拍手も喚声もない。

その代わりに女が歓声を受け、もう一曲、と手を振ってステージに立つ彼女がソウルに一瞬目配りをした。

ソウルは黙ってグラスを置いた。その様をなれた感じでバーテンダーが見やりながら置かれたグラスを取って、後ろのテーブルに置いた。

彼女の声はピアノにしっくりと似合う甘く軽い英語の曲で、彼女の笑顔がライトに照らされいつもよりややクツキリと見えた。その曲

を聴いてソウルは自然とテーブルを指で叩く。彼女の歌は自然と引きずり込むというよりも人を気分酔わす歌で。

「助けも呼ばない、理由も知らない人の苦悩をどうしたら救えるか」

バーテンダーに尋ねる。彼はキュッとグラスを拭いて、一拍置いた。

「難題ですね」

「だろ？こればかりはなんでもかんでもつつこむわけには行かないし」

「問題は”彼女”が助けを”呼べない”のか、まだ”時期”が早いのかだと思いますが」

「呼びたくないってのは無いの？」

「いるにはいますがほとんどが、まあ、例えば失礼ですが不幸の姫様気分味わいたくてわざとだんまりする方って」

マゾヒストに多いんですよ、まあ私の見解ですがねと彼は浅く笑う。

かなりひねくれた考えだとサービスのカクテルに手を出した。ピーチの香りと甘い匂いがほんのりとして、飲めば炭酸が口の中ではじけアルコールが軽く喉を焼いた。

うまい、と親指を出すと彼はにっこりと笑って頷いた。目の端に見えるシワが印象的で「名前、付けてくださいますか」と彼が言う。ん？とカクテルを指で指すと彼はコクリと頷いた。

ステージに向かい合うように座る観客達は彼女の歌をバックコーラ

スに料理をつばみ、パートナーを口説き、体を撫でて、キスをしてきた。端々に見える愛の営みにソウルは唾を吐きたくなる、果たしてそこには愛があるのか商売かSEXのためか。女の声は軽くソウルの皮膚を鼓膜を振動させる。喉が震える、心地よく彼の喉も震えた。

「M a k a  
」

理由は？との問いに必要かと返したら是非と言われたので、少し困って腕を組んだ。

「．．．俺が嫌だから？」

「疑問系ですか、まあ良いでしょう」

適当に理由付けておきましょうというバーテンダーが今度は何かにひらめいたという顔で微笑んだ。

「S A D 〓 B L U E、ひとつ」とソウルがごまかすと彼ははい、とだけ言つて氷を砕き始めた、今だけ彼の微笑んだ顔が憎たらしいと包丁で切られた氷を見ていた、ライトの光が当たり退屈はしない程綺麗だった。

「こら未成年！また来てるのね」

慣れた女の声に振り向くとさっきまでステージにいた女がそこに立



っていた。

観客達がおのずとこっちを見ているのに気付き、立ち上がって隣の椅子を引いてやると彼女は微笑んでそこに座る。

「私も同じやつ」と指を立てた、ピンクのグラデにスパンコールがキラキラと光っている。ソウルが爪をジツと見ていたのに気付いてああ、これ？と爪をソウルに向かって見せた、女らしい細い白い手には宝石のようだと。

「付爪なの、私ピアノもやるし」

「へえ、本当の爪かと思っただよ。似合うね、どこで買ったの」

「なあに？ソウルが付けるの？」

ソウルにはね、濃い紫のマニキュアを短い爪に塗るのがBestだと思っわと彼の手を取る、指の筋を彼女の指が辿る、背筋がゾクリと這い上がる。

ねえ、彼女の指は彼の手から腕へ、腕から肩へと流れそつと肩に頭を置いた。彼女の巻いた茶色の柔らかい髪が首をくすぐる、手の上にまた重ねられた手の爪はやはり綺麗で、暗い部屋の中では光が目立っていた。

ふっ、と耳にかけられた息は暖かく甘く、アルコールを含んでいないはずなのにクラリ、と来た。

「ねえ、どこで売ってるっていったっけ？」

「その話？uttuよ、帰りによりましようか？」

チャリンとテーブルに置かれた合鍵、横を見れば女の挑発する目。ドレスの隙間から胸が見えた。

「uttuね、ありがとさん」

ガタリと椅子を引いたら女がちょっと、と腕を引っ張った。女の茶色い髪がシャツに絡む、綺麗な爪が腕を絡む。

「リッツ」とバーテンダーが細い腕を掴んだ。また今度ね、と手を振った。仕方なさそうにリッツが手を振る、曖昧な微笑み。

黒いテーブルに合鍵が残されていたストラップの星もまた彼女の爪と同様にライトで光る、もうひとつのデイベアが寂しそうに見えた。バーテンダーが、また笑んでいる。

チャリチャリと指で鍵を回しながらマンションの階段を登る、時刻は11時、思った通り部屋には電気が点けられていない。

このマンションの二階の住民の選曲は趣味が合う。部屋のドアから流れてきたRADWIMPSの新曲が聞こえて今度CD借りに行こうかなとか思っていた。

階段の横の窓から見える外は綺麗で、表通りの車のランプやホテルの光がイルミネーションにも見える。毎日見ていれば飽きるけど、彼女は気に入っていた「最高にクールでしょ？」と自分の台詞を奪って微笑んでいた。

明日の朝にはまた怒られるかな、どこ行ってたの！かな。怒る少女

を思い出すと笑んだ。

回していた鍵が指から滑って下に落ちた、ヤベツと拾いにいったら今度は尻のポケットに入れてた箱が落ちた。．．．酔ってるんだらうか？確かに視界がめまぐるしくクラクラとする、はやいとこ寝るかと階段を早めに上がる。

鍵をさした、けれど回さずにドアをゆっくりと開けて、鍵を抜いた。光の付いていない暗い部屋の窓から外の光が見えた、カーテンが閉められていなかった、変に静かですかに二階のRADの曲が聞こえてきた。二階から聞こえてきたんじゃない、頭に焼きついた曲の残骸だったと気付いたのは何度も頭の中でサビが繰り返されていたのに気付いたときで。

ソウルが手に持っていた箱が落ちて、カツンと音が響いた。黒のラッピングに袋に「utter」のロゴ。「Dear・Maka」と書かれた青い紙が衝撃で開かれた。

外から入る光がテーブルの上のソレを光らせる。  
寝不足お月様とよだれだらした太陽のストラップと、銀色の、鍵。

チャリン、ソウルの手の中で鍵が鳴る。ソファに倒れこんだ、酔いは最高潮でこれが夢だろうと思いつくことになった。

残された合鍵(3)

see you , see you

(貴方に会いたい、別れなんて、そんな)

No.3 消えた想い

「マカチャンどうしたの？」

学校の廊下、振り返れば艶やかな黒髪をトップに束ねた女が心配そうに眉をひそめていた。

ああ、頭をひっかく。言葉を探して視線を右に動かすと後ろで死神Jrが他の人と話しをしながらこちらをチラリと横見していて、左に移したらそこには堂々とブラックスターがしゃがんでジッと見上げていた。

それだけでよくやったの判子を贈ってやりたい程、彼が頑張っ静かにしているのが分かった。

しかしそれも続かないらしく「おい、なんだよ！」彼が立ち上がる。

「あんなスターのカケラも見えねえ女に皆して注目しやがって！それくらいなら俺を見るが良い！」

バツ、と手を広げてキッド達に振り返ると彼らがあわあわと互いを見合っている。

どうやら凶星らしく、それから観念したようにとことこと近づき「よう」とトンプソンの sisters が手を上げた、キッドは悪そうに視線を下にはずしている。

「すまん」と言った、ソウルが背中を叩く「気にすんな」と慰めた。

「ブラックスターも気になってしゃがんでたんだろ？」

「おお、そうだった！ソウル、マカどーしてきてねーの？」

頭の上に手を組み首をかしげた彼に椿が頷きトンプソン姉妹も同感だと頷いた。

優等生です皆勤賞狙ってます不勉強なんてなんのこと？授業は全てに出てやります的な彼女が今日、学校に来なかったのが彼らの疑問。昨日は普通にノート取ってたしソウルとも普通だったしなんでだろうと、風邪ならまあ見舞いに行くか！とのノリ。

ソウルの頭に朝になってもテーブルの上にあった彼女の合鍵が頭をよぎった。外のイルミネーション、買った付け爪。

ちよつと考えててボーっとしていたソウルをジ、と皆が見つめているのに気付いて「なんだよ」と言つと「お前も風邪なのか？」と言われた。

二日酔いですと口を滑らせそうになった。

そういえば頭はクラクラするし頭痛はする、いつのまにこんな弱くなっただけ、キッドの顔がダブって見えた。

「顔色悪いよ、家まで送ろうか？それとも保健室に行く？」

「あー、良いよいいよ、ありがとな」

悪いんだけど先に帰らせてもらおうわ、と背を向けると「ソウル」と呼び止める声。

見れば心配してくれる彼等の顔に、少し頭痛が治まったような気がした。

大丈夫、と手を上げてても心配の色は消えなかったけれど「バイバイ」になって、もう一度歩く向きを変えた。

鍵が残されたままの部屋に帰るのは嫌だったけれど生憎この体は家に帰らせてやらなければならなく。

ため息を吐いた。猫が外出していて良かったと思う、この体で自分も把握していない状況を説明するのは困難であるし、嫌だった。

もしかしたら誰か友達の家に泊まって寝過ごしただけかもしれないと、彼は祈る。

今頃「遅刻した！」っキレてるのかなーとか思うと少し笑えたのに、体調直ってきたかなと思ったら横綱の張り手のような頭痛が頭に響いて愕然とする。

酒は絶ちます、女も絶ちます、怒ると分かっててバーにももう行きません。だから、だから、せめて。

帰り道石を蹴った、そういえば学校からの帰り道が一人なのは久しぶりだとやっと気付いた。

カチン、金属の皿の上にメスを置いた。それは血で濡れているが、Mrシユタインの手も作業着もで一種のスプラッターと化している。

作業場はジジジ、と青白い光が点り、音楽のひとつもかけられていない静かというよりも無機質な部屋であるのは壁に床に走った縫い合わせたような跡なせいだろう。

箱から煙草を一本取って啜えて火をつけた、先が赤く燃えてからゆっくりと灰に隠れてゆくのを見て彼はひとつ吸って吐いた。隅に置かれた机の前の回転カラカラ椅子にどっかりと腰掛けた。

天井を見ると電灯に虫が集っている、解剖するかな、と今したばかりだと言うのに笑って呟いた。

おもむろに作業台からそれを持ち上げた、白い手だ、血の通っていないような白い色をしていた。

ギユ、ギユ、と試すように握るとピク、と動いたのによしよしと微笑んでまた作業台に置いた。

その時にその手の酷い火傷の跡に気付いて指でそこをたどった「消しますかね」と言うと言つと手が反応したようにピク、と指を曲げた「嫌なんですね」手の反応は無し。

会話のようなただの彼の決め付けのような、そんな事を何度か繰り返しながら彼はそれをじつと観察する。

白い肌飛び散った赤い血がだんだんと黒く染まっていくな、どうせなら黒血だったらよかったなあ」と彼はへらへらと笑った。

作業台は血の海だ、所々薄く赤い肉片が飛び散っていた、彼の脱いだ手袋にも血が、肉が、彼女の髪の毛の、一房が。

「マカ」

ソレの目がゆっくりと開いた、途中こびり付いて黒く変色した血が糊のように目を塞いでいたから開けたらパリ、と音。彼女の頭から首へ、胸へ大きく裂かれた上から皮膚と皮膚を縫い合わせた跡が痛々しい。皮膚が縫い目に沿ってひっぱられ、たるんでいる。

マカ、もう一度呼んだ声にマカは瞬きをする、意識があるように見えるが意識があるようには見えない、その目は電灯を見ているのに光を通していなかった。

クツクツと喉がなった、彼の喉がだ、猫のように喉を鳴らせた、口は横に開かれ笑みを作る。

指で肌を押して反発する弾力にさらに笑った。

マカの目に鬼が映っているシュタインは、指をへソへ辿っていく、彼女は声も漏らさず反抗せずにされるがままで、その手が尻を撫でた。

「先生、ちびっ子好きなんですか？」

「俺はちびっこもおっきいのも愛せないね」

すぐに返事を返した彼の目が狂気が揺らめいたのが見える、彼の手



つきは官能的で舐めるようだ。

「見つかりました？先生の探してたもの」

「ああ、見つけましたとも、そして頂きましたとも」

振り返り、伸ばした手に握られたビンの中の液体に何か肉片のようなものが水中に浮かんでいるのが見えが、彼女にそれは何かかわからない。

目を細めた、けどそれは何かの内臓のカケラのようにしか見えない。

「人間の脂肪って黄色いんだ」

ブツブツとしてブリブリとしたものが（焼肉についてるソレとそっくりだ）赤い肉の表面についていたのを直感的ですぐに分かった。気持ち悪い、と顔をゆがめた。

シユタインはそれを大事そうに机の一番下の引き出しにしまった、中でそれが揺らいでいたのが見えた。

「ハハ、マカ、今なら俺、普通に交配できそーに興奮してるよ」

「交配だなんて言い方が科学者ですね、私未成年なんで犯罪ですよ」

「犯罪？いいとも犯してみよっか」

「先生の冗談ってイマイチ本当か嘘か分かりません、私」

点滴の中の水滴は一定のリズムでポタリ、ポタリと落ちる。もしか

したら毒じゃないかと思っただがこの状況でなにができる、と考えるのをやめた。

あの蝋燭部屋から目を覚ましたらホラーな展開、作業着着た男にいきなり「手術を開始します」と言われて「あらそうですか」と、「あの枕も毛布もそういうことだったんですね」と言っただけで彼はもう何かを刻んでいるようで顔に血が飛び散っていた。

感じない痛み、けれど何かは切られているのだろう、仕方ないから流れている曲を聴いていた「あ、これソウルほしがってた奴だ」以外といけるなとか。

殺されるとは思わなかった、それは信頼していたからなのか彼が「解剖」ではなく「手術」だと言ったから悪くはならないな、と思ったのはやはり信頼のせいだろう。途中「探し物を出すからね」と言われ癌?!とあせったのが最後。

理由の分からない手術、身を刻む男は無邪気に笑顔だ、狂った笑いだ、それでもマカは安心して眠ったりなんかしてしまった。

指先に神経が戻ってきた、と思っただらジンジンと痛む縫い口、痕が残るんだらうか、女の子だからそれは避けたい事態だ。なによりもこんな傷こさえたら彼に説明するのが面倒じゃないか、ん、彼つて。

「ソウル」

その言葉にピクリと耳を止めた博士、ゆっくりと彼女の顔を覗きこむ。ぼんやりとした目、アホの子のように開かれた口。それを見てご満悦のようで彼はさらににやにや笑った、マカがまあ良いか、とため息を吐いた。  
ああ彼がクールでよかった、別に何も言われる事はないだろう。

「ねえマカ」博士が彼女の首を、傷口の上をわざと手でさする、傷の縫われた所の糸を触った、マカが「痛いです」と非難する。  
悩みは良いのかい、彼女はきよとん、と目を開いた。

「何か悩んでました？私」

博士がいいや、と言って笑う目で彼女をじっと見た、未発達之魂は安定している。

(そのほんの少しの所に縫い口があった、魂の皮膚がつっぱっていた、血のようなものが固まって付いていた。)

「まあもう少し、私の所で入院観察ね」

彼が言う、マカがはいと言って痛みを目をつぶった、博士が痛み止めと彼女にクスリを手渡した。

一緒に渡したコップの水で飲み干す間にマカの長い髪を邪魔そうだねとふたつにくくる。

髪を手でまとめたら、首から胸にかかる縫い口が見えた、ちよつど魂の縫い口と重なって。

彼が口付ける、邪魔だった髪をふたつに束ねた。

(消えた思い、作られた傷口、利口な科学者)

## 残された合鍵（４）

愛しているという声が泣いているように聞こえた

心がいつか人を救うのを君はいつでも知っていたの

NO4、これは誰の涙？

# 歌詞引用：Bgm <sup>カナ</sup>愛し / RADWIMPS

包帯をゆっくりと巻いていくその下には糸で引きつられた傷が茶色い消毒液で軽く染められている。

彼女の要望で流した曲が包帯を解く音を少し聞こえづらくした。だから、マカは彼が本当に包帯を巻いているだけなのかそれとも何かしているのかも分からない。

ねそべった所から顔を捻ると傷口が傷むので捻れずに彼が傷口を触る方向とは逆を向いて歌を口ずさむ。

” ポンポコダンス ” ではなく流行りの歌だ、ソウルの影響なのだろう。その曲は博士は時代が違うので分からない。

「 どうですか？ 痛みますか 」

「痛みます、ねえ先生私っていったいなんの病気だったんですか？」  
「それが言えないのがこの病気の厄介ごとでして」

彼はおもむろにジーコジーコと頭の螺子ネジを回した。

彼はへらへらとしている、それはいつものことだ。厄介ごとだと言っても全然困ったようには見えなくて。ため息を吐いた「お疲れですか？」彼がネジから手を離してまた包帯を巻く。

「サビが付きそうなので洗ってください？手」

「おや、心外ですね。全然これ錆びてませんよ？油も引いてませんし大丈夫」

どんな材質なんだろうか？いやいや今はそんな話題を振ろうとする覚えも無いし振っても自分の言いたい事の確信から遠ざかってしまっただけだ。

彼がゆつくりとまた包帯を巻き始めた。彼女は閉まった扉を見ていた。曲が流れる、流行の男のJ-POP。

そういえばインディーズだっただろうか、メジャーだったか。

「ねえ先生？それでも私、何故か傷口じゃない奥のほうがじんわり痛むんです」

なんなんですかね、ああそうだ、ソウルにはちゃんと伝えていただけでした？と顔を振り向いて、息を呑んだ。彼が険しい目つきで彼女の顔を見つめていたからだ、無言のまままた頭の螺子を回し始め

た、彼女は彼から視線をそらせずにいる。  
側に置いていた液体だけのはずのビンの中からコポリと泡が吹いた。

ガチャンとドアを閉めるとすぐにドサリとフローリングにダイビング、飛び込んだというよりも倒れこんだ。  
ぶつめた頭の中で鐘が鳴る、うーと呻いて頭を抱えて丸くなる、どうせならソファーに倒れたい、負傷兵のような歩伏前進でソファーを目指した。痛い痛い、苦しい苦しい。

ハアハアと変に息を上げながらもどうにかこうにかソファーにたどり着いて、上半身だけを浮かべてごろりと横になった、尻ポケットから携帯がコン、と零れ落ちる音。  
落ちた先に目をやった、テーブルの下に落ちたシルバーのなんもキーホルダーの付いてない携帯、テーブルの上には昨日のまんまのその二つ。

まだ帰ってないんだ、いい加減ため息も出ないからそのまま天井を見上げた。白い高い天井にはシミひとつ見当たらず、ただ開けたままのカーテンの影を忠実に映し出す。

．．．曲も話も歩く音も聞こえないこの部屋はがらんどつで、自分の家じゃない気がしてならない。ずきん、とまた波のように痛みが押し寄せてきて目をぎゅっと締めた。

いつから弱くなったのだろうか、波が引いたところでグツタリとソファーから腕がはみ出た。

(考えればそうだ)

昔は駆けつけに焼酎一本ビールに日本酒ワインを飲んだって次の日にはケロリとしていたのにそれが何だ、今回はまだ一本辺りしか飲んでいない。

(思い出せばそうだ)

酒の匂いをつけて帰れば彼女は「臭い！」と非難してずっと不機嫌で窓を開けっぱなしにするほどそれを嫌っていたから彼は自然と足が遠ざかったのだ、極自然、と。  
それは思い出さなければ気づかないほどにだ。

腕で顔を隠した、瞼ごしの光は失せて目の前は暗くて黒い。  
広い部屋を白い天井を見ているよりは断然良いから彼は目をつぶる、ふっと思いつくその姿が横切つて。歯をかみ締めた。

どこに行っちゃったんだ、鍵はどうしたんだ、帰ってこないのか、俺はどうなるんだ、お前の中に俺はまだ居んのか。

男らしくないけど少しぐらい泣き言吐いたっていいだろうと心の中で叫んだ、頭じゃなくて胸が痛い、酷く死にたい気持ちに追い詰められる。

悲しみがグルグル渦巻いて、でもどうしたら良いかわからなくてそれからチリチリと焼かれるような痛みが胸を苦しめる、これはあれだな、と彼はやっとため息がつけた。

頭の痛みが引いたところで携帯に手を伸ばした(なんとなく手元に



置いておきたかったから）けれどあと指一本の差で届かない。  
床に落ちなきや行けないのか、またため息だ。

ずりりとソファからずり落ちてテーブルの下に体をもぐらせた、  
ずきんとまた頭が痛かったけれど胸が痛いのかと錯覚した。

どっちがより痛いかなんて彼にはもう判別がつかない、不幸すぎる  
のだ、不幸が一気に押し寄せるのだ。

それからうつぶせのまま携帯を取って、アドレス帳を開いて。女の  
名前、あのバーの歌姫の名前を探していたのに気づいてハッとして  
手を止める。

クソ、と吐いて携帯を乱暴に閉じた。どうでもよくなって、という  
かもうどうにでもして、という心境でごろりと仰向けになった、天  
井はさらに遠くなって相変わらずカーテンの陰が映る。

こんなときでも腹は減るものだ、腹をなでてキッチンのある逆の方  
向に顔を向けて、彼はだれた目を見開いた。ゆっくりと上半身を起  
こして、それに指を近づけた。

．．．上着を羽織る、uttuのプレゼントと、合鍵をポケットに  
詰めて。胸の痛みも頭の痛みも胸を走る熱さには適わなかった。

「先生ってお馬鹿ね、何も分かっていないわ」

ゆっくりとうつぶせていた頭をあげればそこにはちよつと笑みを含んだ女。

眼鏡はどこにやっただろうかと手を伸ばしたら「頭の上よ」・・・  
一昔前のコントみみたいだ。頭の眼鏡を耳にかけて、レンズ越しに彼女を見つめた。頭を軽く搔く。

「ちよつとはずれてるだけだと思っけどね」

「そうね、でもはずれてるって要約すると馬鹿って事にもなるんですよ」

彼女が組んでいた足を直した、来ているのは白いワンピースに赤いパンプス。これは夢だろうか？「夢だなんて思わないでください」  
・・・どうやら違うらしい。

「あら、先生お客様だわ」

そう言った次の瞬間インターフォンが響いた、すぐ近くの窓から外を見れば「ああ、」立ち上がると椅子がガタン、と倒れた。カラカラとこれで玄関へ行くのは今回はよしておこう。

ちよつと蓋をずらしてでてっくれませんか？と言われたので「君は逃げるつもりかい」と聞けば「まさか」と笑った。

かけていた白衣を羽織り、置くに寝る少女に軽く声をかけてパタパ

タとスリッパを鳴らして廊下へ出た、ふたを少しずらして。

またリンリン、とベルの音になる。

ツギハギのスリッパで「はい」と玄関に向かいこれまたツギハギの扉を開けて、視線をやや下に下げた。視線をそこにやると立っていたのは白髪の少年で。少しお疲れ気味の顔だった、理由はなんとなく分かった、博士が少し笑んだ。

「こんにちは」

「やあソウル、いらっしやい」

理由は聞かずに「さあ中へ入って」と促すと彼も「ありがとうございます」とだけ言って靴を脱ぎ捨てて廊下へ上がった。

つぎはぎだらけの少年用の青いスリッパ、ゆつくりと閉まる扉。ソウルはゆつくりと周りを見渡しながら廊下を進む、つぎはぎだらけのこの建物は陰険で静かで。

先導する博士がソウルからは見れない顔をゆつくりと笑みに移した。不気味に上がる口角、サディスティックな魂がパリ、と嬉しそうに放電した。

はいございませ。

ピーカーに入ったコーヒーマグがテーブルに差し出した、彼が「どうも」とピーカーを受け取る、その手にはもちろん熱いのでタオル。ゴクリと飲んで、向かいの椅子に座る教師に笑んだ。

「薬品の匂いがしますけどまあうまいです、先生、マカはどこですか？」

博士は何もいわずにジツポの火を煙草に移した。赤い火がジジ、と先端を焼いて灰に火が隠れていく。ソウルはそれを指差した。両方ともうつすらと笑みを浮かべている。

「うちに煙草の灰が落ちていました、あるわけないんです、俺、タバコ吸わないしあいつが吸うわけなんか無い」

そう、あの時彼が見つけたのはまとまった灰だったのだ。ソウルが知らず知らず手を握り締めた、博士は彼を見据えて何も言わない。煙草を吐いた、長い長い煙は途中で上へ昇り消えていく。煙越しに彼を見る。

「あなたの吸ってる銘柄、当ててみようか？すごく自信あるんだけど」

「鼻が利きますねえ、まるで犬のようだ。主人を探しにわざわざ私の所に来るだなんて泣かせますね、どうです？テレビにでも出たら」  
「ハン、あなたの冗談は笑えないね、センスが無い、言わないほう

が断然あなたはクールだ」

「口が減りませんねえ、このクソ犬」

「あんたからしたらそうだろうな、それでもいいからさっさと返してくれよ、俺はあんたとジョークを交わしにきたんだ、俺が来た用事はマカだけなんだ」

言葉遣いが荒くなってきた彼の手へ視線を移せば汗がじんわりと光っているのが見えて。

よくよく考えてみれば格段上と分かっているだろう犯罪者の元にパートナーなしで訪れたのだ。

人間で例えるなら桃太郎が手下を引き連れず黍団子キヒタンゴを持たずに鬼が島へ単身訪れるようなものだ。

表面上は涼しく見せるソウルに博士はへらりと笑った、陰が映る、部屋に煙が漂う。

「これを機にパートナーを変えたらどうです？いや、是非そうしましょう、初めて会ったとき言ったでしょう？合ってるようで合っていないと」

「あんたそれもおふざけか」

「いえいえこれは教師としてのアドバイス、助言ですよ」

本当ですよ？煙草の灰を灰皿に落とした。ソウルは不愉快と眉を片方ひそめて唇を尖らせた。

「別にいいでしょう？あなたも武器なら彼女に依存するのはやめな

さいな、いずれあなたは離れることになるのだから  
「別れねえよ、離れたりなんかしない」

俺は、と。

「マカが好きだ、愛してるんだ、職人としてじゃない、”マカ”を  
愛してるんだ」

（それはいつの間にか浴びるほどの酒を忘れられる位一人の寂しさが  
堪えられなくなる位マカがいないと拗ねてしまってくるくらいに。）

「逢いたいんだ、俺にはヤツだけだ、なあ」

だから、と言いかけた時だった、ポタリ、と彼の服に水が垂れたの  
が見えて、ソウルが上を見上げた、視界が潤んでいてソウルが驚い  
てあ、と呟いた。

彼は泣いていた、不思議そうな顔をして。

気づけば止まらず次から次へとポタポタと水滴に変わる涙を指で拭  
いてはまたパタパタと服の上に落ちる涙を拭いて。

ああクソ、なんだよ、これ、と拭いても止まらないそれに彼は困り  
果てているようで何度も何度も止まらない涙を拭きながら同じよう  
な言葉を繰り返す。

博士がハツとして机に視線をやった、そして珍しくその目を見開いた。

ビンに詰められた彼女はソウルと同じように止まらないビンの中の液体よりも透明に近い青い涙を拭くことなく下にポットンポットンと玉のようなそれを落としていた。

彼に向けていた悲壮な顔でゆっくりと博士に振り返る、ゆっくりと一度二度瞬きをするとそれはより大きな玉となって足もとに落ちる。石のようにそれは足元で積み重なっていく。

「先生、驚いているのね、だからあなたは分かっているって言ったじゃない」

どうやらソウルには聞こえないようだ、彼はまだ袖で顔を拭いている。

不快に顔を潜めた、彼女は目から零れ落ちるそれを掌いっぱいに乗せてそれを見せ付けるように、それを目から零しながら言う。

「私も彼も愛し合ってる、体はふたつ、けれど愛はひとつにもなれるの」

彼の涙は誰の涙だと思ってるの？

その言葉に何も返すことが出来ずに涙に困り果ててる彼にティッシュを差し出した。涙に潤む彼の瞳は彼女のポロポロと落とす涙と同じ

様に綺麗で。

「すみません」とすっかりペースを落とした彼を見下ろして、忘れかけていた煙草をおもいつき吸うと灰がボロボロと零れ落ちた。それを知りたいんだ、逢いたい逢わせてと隠さずに彼女への愛を言ったソウルをじっと見つめる、羨望の眼差しだった、切なくも悲しくも思えるような寂しい目だった。

「…俺も誰かを愛したいんだよ、ソウル」

ビンの中の彼女だけが博士を見ていた。博士の声はそれはそれは小さかったからソウルには聞こえない。けれど彼女に聞こえたその声は震えていて目の前で泣く彼の声とそう変わらないものだった。

(困ったという涙さえも羨ましい、と)



## 残された合鍵（5）

「世界は謎を孕<sup>はら</sup>んでいる　だから愛しいのでしょう」

それをミステリアス、というのよ

どちらが教師なのだろう彼女の教えを聞く  
閉じ込められたビンの中　彼女は足を組む

NO5・癒えないキズ（Last Order）

ただいまー、と入って靴をさっさと脱いでボスン、とソファーにダイブ。

それをうしろから荷物を抱えた少年が制した「傷口開くだろう」と。

大丈夫だよ、心配してくれてありがと。ひらひらと手を後ろに振ってみる。

彼のため息が後ろから聞こえたからぐい、と上半身を浮かせ、大丈夫、大丈夫、と言ってやったが、けれど彼は納得いかない様子。

「ソウル、パパみただよ。過保護すぎて」

ソウルがパツ、と目をパチパチさせて、それからあきらめたように笑った。

「不本意だけど今ならマカパパの気持ちが手に取るように分かるよ」

ドサリ、と彼女の荷物を置いて、それからすぐキッチンへ向かう彼の背中には心なしかしょぼくれている。ジュース飲むよな、という声も幾分か元気の無いもので。

それをマカは「博士にのこのこ付いて行ったあげくに見事解体された女を呆れている」のだと勘違いして、ちよつとした声で、ごめんね、と無い背中に誤った。

「いや、別に」とソウルは大きな声で返したのをマカは少し恥ずかしそうな顔で聞いた。

「でも私が悪いんじゃないから」  
「言つと思つたよ」

だからいやよつて言ったんだよ。と彼はオレンジジュースを両手に持って、笑った。

「そーよ、悪いのはあなた」  
「理解の前にはほんの少しの犠牲も必要なんだ」

マッド・サイエンティストの考えね、彼女は自分の金髪を暇そうにクルクルと指で弄ぶ。細い指、マニキュアの塗られた桜貝の爪。博士はふむ、と書類を手にペンでさらさらと走り書き、それを彼女は気にせずに、目線は博士のめがね。

あなたはそれを知ってどうするのかしら。

それは尋ねた。

もちろん誰かを愛するのだろうかね。

彼は答えた、いかにも気取った返事だった。

彼女は、フン、とつまらないと鼻を鳴らし、整った爪を広げて何度も見て、フツ、と爪に息を吹きかけ指先で爪を何度も撫でた。女らしいその仕草、けれど男はどうとも思えない、発情も、なんも熱も持たない。

組み替えた細い足の筋肉の筋にも、くびれたウエストにも、スツとしたくるぶしにも。

ここで誤解されるようだが自分はホモでもないと断言しておく、昔それは実験済みで、なんとも面白くないデータが取れたものである。

どこか「あの子」に似た目の前の「女」がグリグリした青い目でこちらを上目遣い、あの子はこんな技なんて持つちゃいけないけれど。金髪の睫毛がパチパチと音をたてた気がするような瞬きをして、ああ、とつぶやいた。それから期待どおりだわとも言って興味のをげた顔をした。

ペンを紙に走らせる、女の動向をイチイチ書いている。

「あなたは、一応”愛”を知ってはいるわ」

眼鏡の奥の瞳が光る。

ギリリ、それは刃物が光を反射したような鋭く、そしてどこか怖いものであった。そう？。ええ、そうですとも。

83

「あなたの愛は、ソウルやマカのものとは違うのよ、マカ達で知ろうとしても無理なんでしょうね」

「違うって？それじゃあ彼らは”愛”ではなく”恋”であったとでも？？」

「違うものは違うのよ、愛を確定させようなんてマニュアル馬鹿の考えることよ」

そうね、そういえばあんたはいかれたテキストを作るような、そんな男ね。女はふっ、と髪をふいた。

「愛は”興味”よ、そういえば分かる？」

博士がペンを落とした。その床の、博士の後ろ側の壁においてある  
ビン棚に心狭しと飾られている劇薬・ホルマリン。

(緑の肌をした二つ頭の餓鬼が浮かぶ)

(白い爪した狼男の手が泡を吹く)

黄色の目を向いたひどい顔した女と後ろを向いていた博士と目があ  
った、彼らはいずれも幸福そうな顔をしてなんかいない。

無表情か、それとも無機質か、あるいは激しい顔をしているものば  
かりで常人の趣味には合わないものばかり。

博士が目を見開いてそれらを見つめた、口をあけたまま。彼らはい  
ずれも博士を見て、目を光らせているかのように思えた。

女はさも、つまらない、とまた手の指をいじりだす。博士が言う。

「これが、か」

部屋が暗く感じる、ああそういえばカーテンは開いているのか、開  
いていないのか？

廊下を小動物が走り回る音がした、そいつらの体には彼の刻み付け  
た跡が残っているだろう。

ねずみやら猫だけではない、彼のいるこの空間、陰湿な空気、無機  
質な部屋全てに、彼の劣情の傷跡が縫い付けられているのだ。

彼が頬を引つかいて、それからねじを忙せうしくぎこぎことまわし始  
めた。ねじは何の意味があるのか、何度も、何度も音を響かせまわ  
る。

「そう、これがあなたが人生をかけて”愛してきた”ものよ」

あなたはその癒えない傷跡を「愛している」のよ。と女は続けて、それから 爪を少しかじった。

まあ何はともあれ、戻ってこれてよかったな。

目の前に広がる手のこった料理を目の前にマカはえ、と頭をあげた。彼がエプロン姿に、ファンキーななべつかみをはめて、鍋をちよどどテーブルに置くところだった。その彼の肩の上には黒猫が目を輝かせて鍋の中の魚によだれをたらしていた。

ほら、博士だよ。というところ「ああ」とやっとな得できたようで、またテーブルの上のセッティングを始めた。フォークに、スプーン、それからお皿。

「お前なあ」とまたソウルがため息を吐いた。今日一日何度はかれた事だろうか、仕方ないから意見も何もできやしないが。

「そんなだから攫サラわれるんだ」

「まあ運が悪かったね」

また「お前なあ」。鍋のふたをあけたらほっこりとした湯気と共に、美味しい匂いがたちまち立ち込める。猫がキヤア！と感銘をあげた、マカがうまそうだね、と取皿をわけた。まったく。

「危機管理意識持ってくださいなLady？」  
「うーん」

でもね、ソウル。マカが箸を白菜に伸ばす、彼が顔をあげて彼女を見た。

青い目が伏せられて、鍋の薄い白い湯気越しに見えた。唇が動く、彼女が言った。

（（金髪睫毛、ひとつ瞬き））

「「かわいそうだったわ」」

女は博士を見据えてそういった、彼は口をあけたまま、後ろを振り向く、また目の光がキラキラと光っていた。

「魚みたいね、気持ち悪い、私ソウルのような目のほうが好きよ」

「君の好みはそこまでいい、今なんて言ったんだい？」

かわいそう、って言ったのよ。耳をひっかく。

あなたは干からびたゾンビを解体することを愛せてもゾンビを愛せやしない、自己満足の一人プレーの愛しか持ち合わせてないのよ。それ以外持てないから、けれどそれをあなたは否定するでしょ？分かるうとしない、だから「かわいそうなの」。

あなたは人から受ける愛なんてどうだって良いんじゃないの？

だから、解体して、わかつたつもり、それで終わりなの。興味が消えて、終わりよ。

博士がいすに座ったまま、その話しを聞いていた。けれど、もう、何も言わずにいすに座ったまま。「ああ、ごめんなさい」女が立ち上がる。

「そろそろ、あの子のどこ、戻るわ？どうやらねえ、また良いシチュエーションのようだから」

ごめんなさいね、と彼女は言って、手を振った。

そのまま、男が何を考える時間も持たせずに彼女は消えた。す、とあのろうそくの煙のように、男のタバコのように、鍋の湯気のように。

ただ一人残された男はまた、後ろのビンを振り返って、そのまま見つめていた。



マカ、ほら、ちゃんとベッドで寝ろつて。

目をゆっくりと開いたら彼がいて、ん？と周りを見ると分厚い本がそこらに散乱している、ああ、あのまま寝たのか。気づけば入れてくれたココアはすっかり冷えて、時計は11時を示してる。かけられた毛布は暖かった、ソウルがまた目と同じようにするマカの肩を軽く揺さぶる。

「ほら、寝るなら部屋で」

「やーもーここにいでー」

いー、じゃなくて。彼女はまた瞳を閉じる、だって今、とっても気持ち良いのよ、彼女が言った。ああ、そういえば。

「私ね、ちょっと悩みがあったはずなの」  
「悩み？」

「そう、悩み、でも博士のところに行ってから忘れちゃった、でもね」

まだ、その悩みがグジュグジュしてるかのように、頭がもやもやしてるの、どっと思っつ、どっつらどっつら、ぼやいたら「知るか」とつめ

たい一言。

俺はその悩み、聞いてないぞ。と少し拗ねた声でした。ごめんね、でも眠たいから誤っているような声ではなかった。

ソウルが今日何度目かのため息を吐いて（何度吐いたことか）ほら、乗れよ、と彼女の座るソファの前にしゃがんで、ぐい、と彼女の腕をひいた。

それから背中に乗ったのを確認して立ち上がり、もう一度彼女を抱えなおした。マカがむにやむにやと何かを言った。ああ、はいはい。ソウルがうっすらと口元を緩める。

「今度、また、思い出したらで良いよ」

パタン、とマカの部屋のドアが閉まる。

GOOD NIGHT my master .

きっと今夜は 良い夢を。

明日もきっと 良い夢を。

END

残された合鍵(5) (後書き)

博士はマカの魂から恋心を切り取った。

そうしたら恋心は女の姿をとり、博士に問う。

そんなお話でした。

軌跡に残る泥（ソウマカ）

踝くるぶしまで愛してると言っつて足にキスして

そこまでしなきや信じられないから

殺された Nancy ナンシー Spungen スパンゲン 貴女は不幸で幸いだ

指の先まで食べて抱きしめてそして優しくおやすみを

t i t l e : 軌跡に残る泥

(ソウマカ)

隣に座る彼女は頭から毛布をかぶる、寒い事はない。  
唯<sup>ただ</sup>目の前のテレビに映る安っぽいホラー映画から自分の目を守るた  
めだろう。

明かりを落としたリビング、テレビの画面の光が薄暗く部屋を照ら  
す。

二人はソファーに各々好き勝手に並んだはずだったがけれど、結局二  
人仲良く並んでソウルの借りてきたB級ホラーを眺めている。

内容はありきたりで溜息が出るほど陳腐<sup>チンプ</sup>だ。

母を亡くした父娘息子の3人家族が幽霊の住むゴーストホームへ引  
越してくる。

襲いかかる幽霊には捕まり時に喰われかけて最後には結局お決  
まりのハッピーエンド。

母の幽霊が助けにきて、家族を守り家から幽霊がいなくなる。そん  
な最後。

毛布に包まれていたものの、マカは至って普通だったようだ。

上映中も終わった後の現在も平然としている。それ喰い物か?!と  
いう原色のスライム・ゼリーをちゅるちゅると食べている。

ソウルは終わったDVDをデッキから外して、元のケースへと戻す。

テレビのチャンネルを変えるとスーツのお姉さんが真面目な顔を  
してこちらを睨む。ニュースです。今日一日の動きは…お姉さんが朗  
々と、セリフを読む。

マカはニュースをどうでもよさげに見つつ、ゼリーを啜える。

「最後はやっぱり幸せなのね」

「そりゃ作りもんだだけでも幸せになってほしいだろうよ」

現実には救われない報われない不幸が用意されてるからもうたくさ  
んで。

せめて夢か妄想の中では幸せが良いと望むのは、人の情だ。そう思  
うのは普通ではなからうか。

ソウルはそう思いながら、またマカの横にバスツと尻を置いた。

「なんか報われないな」

「何がよなに」

「お母さんが助けてくれた、キヤー嬉しいー、これにて万歳、何か  
な」

マカは毛布から頭をひょっこり出す。

いつものようなツインテールをしていない。さらさらと結わえてい  
ない髪が肩を流れていた。

彼女はゼリーのカップを前のテーブルにカツ、と置いて毛布に潜り  
込む。

マカが足を延ばすものだから、彼の膝の上まで彼女の足が伸びてき

た。なんて迷惑な奴だ。

「いいじゃねーの」

「いいんだけどねーなんだかねー」

煮え切らない言葉をマカは繰り返す。

接している足が彼を拘束するかのように乗せられていて、彼は彼女を見遣る。

すっかり体をソファーに横たえて眠る準備ができているようだ。毛布からはみ出る顔を除けば瞼はぼつちり下がっている。それなのに彼の足はがっちり抑えられている。

彼は観念した。

わかりにくいその感情表現に、彼はわかりやすいため息を吐きつつ、優越感に胸を焼く。



ママは貴方達を見守ってるよ

ママは貴方達を待ってるけれどそろそろ早く来ないで頂戴

ママは、ママは...

「あれだ、あの映画はさママが報われて無いな」

ソウルはそう言って彼女の足を少し毛布からはみ出させる。  
小さな足、切られたばかりの桜色の小さな爪がそこに在って、白い  
肌が暗闇の中でぼんやり浮き上がって見える。

白い足にとろどろとろどろピンクのひきつれた肉の傷痕がある、やんち  
や坊主のような足。

「ああ、そつね」

「あれ、その事言ってたんじゃねーの？」  
「うーんと、なんだっけかな・・・」

彼女は話を紛らわせる、言えないのか言いたくないのか。

足に指を這わす。こんなところまでどうやったら怪我をするのか、彼はわからない。

彼は少し冷たい足の先を手で覆う。指の先まで、大きな指で包む。

こうして彼が彼女の足の世話をしたってマカは何も言わない。

けれどソウルには分かっていた、彼女が今何を考えてぐるぐる思考を巡らせているのか。

わかっているからソウルはその話題に触れず、ぬるま湯のような接し方をする。

ただただ甘い、彼女を包む、そんな卑怯な愛し方をする。

救いもしなければ、解決もさせない、ただ甘やかして懐かせるだけの卑怯な愛だ。

(そう、卑怯だ)

父親に散々裏切られて、手を延ばせばいいのかどうすりゃいいのか迷う幼子のような可愛い子供。

そんな彼女に彼は甘く甘く接して、気持ちよかろうとぬるま湯に浸らせる。

これは一見優しさだ、でもこれはそんなもんじゃない。

彼女の白い指をつまむ、爪をいじって。  
何も言わずなされるがままに。

(そう、匂わせちゃいけない)

しかし彼の手は、素直だ。

足をなぞる、筋に沿って指が這う。その動きは決して生易しいもの  
じゃない。

そう彼にも分かった。

これは卑怯なやり口、わかっているながら自分を甘やかす

罪悪感と背徳感を彼は上手に隠して彼女を甘やかす

仁徳など知ったことじゃない、ぬるま湯に浸らせる

「マ、カ…？」

顔を覗き込むと、彼女はゆっくりと規則正しく寝息を繰り返していた。

いつの間にか本当に眠ってしまったのだろう。

安心しきって眠る、年相応なその表情にソウルは、瞼をつぶる。

(そう、これはそんな生易しいぬるいものじゃない)

(これはエゴだ)

ソウルはその細い足首をつかむ。男のソレとは違う、少年のような、けれど生々しい女の足だ。

そうこれは男を知らない信じられないという少女への執拗で酷いやり口だ。

ゆっくりと信じさせて信じさせて。心地いいと刷りこんで、安心させて。

けれど彼は色恋の匂いをももし出さない、何故かってそりや彼女が逃げるかもしれないからだ。

親の件で彼女はきつとそんな男を信用すらできないだろう。

そして隣にいるのは自分である、自分を甘やかして、辛いものにはふたをする、なんて都合のいい男。

そうしてゆっくりと浸透していく。

無害だとそう信じ込ませて、そして最後は決まってる。ハッピーエンドだ。自分にとっての。

「マカ」

愛してる、愛してる……。それが言えない、けれど言えないことに安堵する。

「こんなに、おまえを知ってるのは俺だけだよ」

こんな卑怯なやり口が通るから。

問題なんて放っておけばいい、そう、決まりきった幸せがくればい  
い。

安心しきったマカの足の甲に、キスを落とす。慣れた石鹼の匂いが  
した。



軌跡に残る泥（ソウマカ）（後書き）

男を信用しない、そういった精神が危ういマカちゃんをソウル君が  
手籠にしようとするの図。

…本誌だとありえなさそうじゃい（＾　＾　汗

ちなみにナンシー・スパンゲンはシド・ヴィシャスの恋人。  
シドに殺されたんではないかという説があるが明らかにされたいな  
い。

幸せな marijuana (ソウマカ)

これしか残ってないのにピースが填<sup>は</sup>まらない

無理矢理入れればピースの形はひしゃげるばかりで

どうしろってんだ 手のひらの中のピースは答えを言わない

title: 幸せな マリファナ marijuana  
(ソウマカ)

「下げて、ポリウム」

彼女が呟いた。

立派な布地の表紙で縁にスパンコールが付いた分厚い本に視線を下ろして。

見下ろした<sup>まぶた</sup>瞼に<sup>みぢ</sup>縁取られる<sup>まじげ</sup>睫毛が重たげに何度か、確かに<sup>まはた</sup>瞬きを繰り返していた。

振り向けば睫毛越に見えた緑の目が文字をたどっているのだろう、瞳孔が左右に揺れていた。

慣れた部屋のくたびれたソファに身を寄せて。

流れる曲を嫌がって彼に呟いた。

窓から入る光が彼女の背後で淡く照らした。

そうして何もアクション起こさない彼に彼女は顔を上げた。

「ソウル、」額に落ちる前髪が揺れて、不満げに歪む顔は見慣れているものだ。

テーブルに置かれていた彼ご自慢のケーキとそれからミルクティーの甘く安心する香りが湯気と共に部屋に充滿していた。

振り向いた自分、針の落とされた手元のレコード、プレイヤー。

瞬きをした、「ソウル」彼女が名前を読んで「音量だつてば」そう不満を漏らす。

「…ん、あ」

「本読んでるときは落とす約束でしょ？じゃなきゃ部屋で聞いて」

突き放すようにも聞こえる不満、そして彼女は手元の花柄のティーカップに手を付けた。

「マカ、」彼女がカップに視線を下ろして唇を付ける。膝の上に置かれたお高そうな本のページがパラパラと巻くれていた。

飲んで、名を呼ぶ彼に視線を上げる。上目使い、けれどもどこか不満げに。

「だから、合わないのね」

彼女が呟く。

回るレコードが彼女の嫌いな歌を歌い、彼女は彼の嫌いな大袈裟な  
分厚い本を読む。

窓の日の光が段々と色を変わっていく、彼女の白いシャツが窓の色  
に染まっていった。

そうして柔らかかった日の光は鋭いものへと変わっていき、彼女の  
顔は逆行で見えにくかった。

態々布で被される仰々しい本に魅力もロマンも彼は抱けない。

文字を辿るだけの目の運動でさえ億劫。

部屋の棚に置かれるのは背表紙ではなく薄いレコードの束に薄い雑  
誌。

「だから、合わないのね」

彼女は繰り返した。

変わらない無表情は不気味でそれでいて恐ろしい。

彼は何かを言いたかったが口が滑らない、焦って、言葉が口へと流れない。

ソウルの背の後ろでは相も変わらずにうるさいロックがかかっていて、ツマミをいじっていないのにポリウムがだんだんと上がるのがわかった。

それをマカは無情に見ている。日の明かりはピンク色をしていて、ソウルの背筋に汗が流れた。

「合っていた、よ」

「デコボコを無理矢理、合わなかった部分が捲れてさえ私たちは気づかないふりをし続けた」

無表情だった。彼女は冷静に、無情に落ち付いていた。

「気づいていた、それでも私たちは馬鹿を装って放置していた」

言葉を発せないのは、凶星だったからだろうか。

彼女は顔を上げて手元にお気に入りの赤の布地の本の背表紙を指先でなぞっていた。

窓が段々とムラサキに変わり、紺色へと移ろうとしていた。

口を開いた自分、彼女は一層彼を見上げて、唇を震わせる。

開いた唇から、鮮血が垂れた

「ソウル、」彼女が呟く「だから合わないのね」零れる吐血が泡ぶく血が零れたのは女の小さな唇、彼女は眼を伏せて「致命的になるまで」言葉が泡ぶく

背後の窓に確実な闇が迫る、それを見て男は嘲笑い、狂気を嗤った。



…田の前で黒くノートが回って来る。

ソウルは何度か瞬きを繰り返す、レコードのつまみを握っている手が止まっていた。

窓の明かりは白色で淡く部屋を照らし、テーブルの上には彼が入れたばかりのコーヒーが湯気を燻らす。

過去の残骸だった、すべてが過去形で終わる、遺跡。

ポケットにつつこんだままの携帯が震えて、そうつと耳に当てる。

「ソウル？」慣れた女の声、「マカ、」彼は彼女の名を呼ぶ。

「元気そうじゃない」そういう彼女の声も元気そうで、彼は少し嫌になる。

「ああ、まあね、そっちはどう」

「今時の子供に苦労してる」

「お前頭固いからなあ」

「うるさい」

「ハハ、でもあのBOY君は頭が柔らかかったよな」

「そう、言わなくてもちやっかりフォローしてくれるから嫌になる」

新しいBOY君、と彼女のパートナーに嫌味を含めた言葉を彼女は茶化して笑う。

知らないでしょう、そこに本気の嫌悪を含めたことを女は気づきもしない。

いくつか世間話をして、それから何も思わない風を装って仕事の話をした。

そして自然とお別れの言葉を言って携帯を切る。

彼女がくつろいでいたソファーには、マンガ本が散らばり、クッシヨンがいくつか置かれていた。

手を動かす、あの頃から少しは大きくなったであろう指先でつまみを動かす。すると、音量がだんだんと上がる。

「下げて、ボリューム」

彼女が呟く。

振り向いた先で彼女は布の表紙の本のページを丁寧に捲めくっていた。  
窓の明かり、ミルクティーの香、そうして彼女の息づく呼吸音。

ソウルは回るレコードを見下ろして、嗤わらう。

全ては残された残骸、そうと知って彼は狂気を嗤わらった。

幸せな *Marijuana* (ソウマカ) (後書き)

マカちゃんとソウル君が別れた後の話。

■零れた愛憎（ソウマカ）

灰かぶり娘 彼女にはまだ情があったのだから

夢のような終わりを告げて 硝子の靴さえ残さない貴女を愛していた

t i t l e : 零れた愛憎



唇に艶めくグロスをのせて、軽くティッシュを唇で噛んだ。

そうして、纏めずに下ろした髪を鏡で再度確認をして。  
そうして、立ちあがるとシフォンのワンピースの裾が揺れる。  
そうして、女の匂いをさせた目の前の少女は小さくて機能性の低い  
バッグを手に持つ。

その指先には、人工的な淡いピンク色をのせて傷の見える肩はむき  
だし。

赤いパンプス、高いヒールを鳴らせて彼女は扉を開く。

「何処行くの」  
「デパート」

慣れなくて似合わない「女」の格好したマカが化粧を施した小さな顔で振り向いた。

下ろされた頬にかかる淡い栗毛がソウルには見慣れなくて、酷く可笑しく、滑稽こっけいに見えた。

艶やかな小さな唇に小さな焦燥しょうそうと憎にくしみが湧くのをソウルは知っていた。

けれどソウルは無関心を決め込んで、ポーカーフェイスを貫いてみる。

「飯は？」

「食べてくるよ」

「あ、そう、」

「9時には帰るけど、先寝ててもいいから」

なんの解決にもなりやしなないというのに、その問題をそうしてソウルは見ぬふりをする。

マカは、ぱつちりと上げられた睫毛が何度か瞬かせた。

「早くいけば？」玄関口で止まる彼女にそう無愛想に言えば、彼女は変な笑顔を浮かべる。

艶やかなグロツシーな唇が可笑しく笑みを形作る。

彩られた眼の縁がソウルをいらつかせた。

ひきつれた傷の残る肩を、彼は見つめる。レースの編みこまれたワ  
ンピースは酷く似合わない。

「…何か、羽織っていけば？その傷見て相手萎えるんじゃないの」  
「酷いねソウル、でもいいの、彼あんまりそういうの気にする人じ  
やないみたい」

そう言って、彼は小さな傷をピンク色した爪でなぞった。

酷く滑稽だった、幼い少女が女の形を気取る。背丈に合わない服を  
着た、<sup>ガキ</sup>餓鬼。

「じゃ、時間だから行くね」

そう言って彼女は化粧した顔に笑みを浮かべて、ドアノブを掴んだ。  
彼は出ていく彼女を見つめるばかりで。

「ソウルは酷いね、so・coolだなんて愛の前じゃ意味もないのよ」

最後に、シフォンの裾が吸い込まれていって、重苦しい音を立てて、ドアが閉まる。

あの女の形した少女はまだ同じとしてkissもsexにも慣れていない綿パンツをはくような子だったというのに。

いつの間に、ヒールを鳴らす煌びやかなシンデレラへと変わっていたのだろう。

魔法をかけた魔法使いに彼は逆恨んでみる。

滑稽な男が残される。  
彼はその場から動けなかった。

零れた愛憎（ソウマカ）（後書き）

マカちゃんにかれしができましたっていう妄想。  
不憫なソウルを38は応援します。（コラ）

Morphine(ソウマカ)

眠れない夜を優しく包む恋のメロディ  
抱きしめて今夜だけこのままでいて  
眠れない夜を優しく包む恋のメロディ  
抱きしめて今夜だけこのままでいて・・・

f r o m . . . 銀杏BOYZ / 援助交際

t  
i  
t  
l  
e  
:  
Mモルヒネ  
o  
r  
p  
h  
i  
n  
e



白い肌をなぞられて、快感に打ち震えた足がシルクのシーツに皺シワを寄せる。

媚コびた喘ぎ声がピークになる頃に男が獣じみた唸り声をあげて打ちつけていた汚い尻をとめた。

彼女は白魚のような足を痙攣させて、自分にのしかかる男に足を巻きつかせた。

男はそれを喜んで顔を近づけた、煙草臭い唇で、彼女にキスをした。臭い舌を受け入れて、甘い牙で柔らかかに噛む。

酷く淫猥<sup>インロウ</sup>で、興奮、そして空<sup>むな</sup>しさの残る、彼等のキス。

処方箋が出される、心の病に出される薬なんて麻薬に等しい。

薬で空しさを興奮を静める、なんて便利な世の中になったんだろう。

そう言う意味では寂しさを体で埋める行為も麻薬に等しかった。

彼女にとっても処方箋、それはSEX、尻軽女の誕生。

彼女は情事の色も残さず清楚な制服で夜の街をひた歩く。

「何処行つてたの」

「パパのところ」

「あ、そ」

マカは羽織っていたコートをフックに掛けると、あまりにも重い足でソファーに倒れた。

その様子をうかがっていたソウルは、ソファーから動こうとしないマカを見てキッチンへと姿を消す。

「お土産あるよ」と言うと「じゃあお茶だな」と、キッチンから遠い声。いつもと変わらないその声にマカはふう、と息をつく。

じっと見つめているのはいつもの天井。  
白い壁紙が貼られただけの味気も何もない良く言えばシンプルな天  
井。

最近のキッチン事情はすごい発展を遂げているようで、待たずとも  
すぐに熱々のお茶が出てきた。

前にソウルが「すげえ！買おうぜ！！」と息を巻いて買った湯沸か  
し器、名前はなんだったか、とても覚えやすそうなシンプルな名前  
だったけれど思い出せない。

そして寝ころびながら横目にソウルが甲斐甲斐しくお茶の用意をす  
るのを見ている。

下ろされた銀髪の前髪が、いつもはツンツンに立たされているのに  
シャワーを浴びた手なのか柔らかくふわふわしていた。

手元を見る目もと、髪と同じ銀色の濃い睫毛のせいで下を見ている  
赤い目が隠されていて綺麗な横顔だな、とふと感じてしまう。

箱からマカの買ってきたケーキが出される。「ホールかよ」と彼が  
ぷつと声をもらした。「だって食べたかったんだもん」そう言って  
笑って反論。

「欲望に忠実だな」  
「当然」

ソウルは鼻を鳴らすと、寝転がっていたマカの上にわざと腰かけた。

うぎゃあと下から悲鳴が聞こえる。言わずもがな、彼女の声だ。それをソウルは笑ってわざとシカトして用意したほうじ茶をすすった。

「なあ、マカ」

彼が、湯呑から唇を離す。

「別れるか？」

マカが、言葉の意味を頭で理解するよりも先に顔から血の気の引く音がした。

マカちゃんは パパが大好き

でもパパはマカちゃんもママも捨てて女遊び

なんで捨てたのパパ

あたしの事嫌い？

訪ねたって返ってくるのは薄っぺらいその場しのぎ

「パパはマカが好きだよ」

反吐に捨てたい。

目が自然、見開かれて。言葉も出ない唇が阿呆のように中途半端に開かれて。

見つめる彼は、事も無さげに彼女を見つめている、ああ表情すら何も無さげに普通だから彼女は彼が何を思っているのかくみ取ることができなくて、混乱する。

え、彼女が眩く。

彼がテーブルに手を伸ばした。

男にしては白くて、けれど筋肉がついて筋張った、愛着の湧く腕だ。

そして伸ばした手で湯呑を掴んで、彼女の前に差し出した。未だ湯気の湧きたつ、香ばしい香りのするお茶。

彼女は、条件反射でそれを両手で受け取って、すする。視線は彼に合わせたまま。

頭は真つ白だった、何も考えが湧きやしない。

それでも感情は渦巻くばかりで、胸を頭を喉を駆け巡る。

「…ソウル」

「お前のパパって、黒髪だったっけ？」

ツ、とのばされた指先にビクツと体を震わせて（けれどソウルは反応しない）。

目の前に下された指先には少し痛んだ短い黒髪。

「俺、全部知ってたよ」



体が震えだす、恐怖だ、悲しみだった。

彼女の歯がカチカチとなりだした、止めようとしたって止まらないだろう。

彼女は止めようとしなけれど。なぜなら彼女は今日の前の彼で、頭がいつぱいだったから。

（彼は自分を見つめる、その視線が揺らがないからこそ、恐ろしい）  
逃げたい焦燥に襲われる、感情が先走って何も言えやしない。

「…そ、うる」

「ビツチめ、」

カチカチカチカチ、

目に涙がたまっていく、指先から血がひかれていく。

何も言えないから、彼の言葉を待つ自分はきつと彼から見たら馬鹿で阿呆な売女なんだろう。

視線で、見下される。

軽蔑されて線を引かれる。

「そつる」

「それしか言えないのか？ハン、本当馬鹿だな、やりすぎて脳みそパーになったんじゃねえの」

彼がつまんだ髪をその場に落として、彼女の頬に触れる。その所作が、怖い。

もう片方も頬を掴むから、彼女は顔をそらせず、自分に押し掛かっている彼を見上げるしかできない。

「・・・馬鹿女」

彼が、彼女が両手で持っていた湯呑のお茶を啜ろうとしたから、マカは自然と飲みやすいように湯呑を口元へと寄せた。

そこで湯のみが震えていたから、彼女は自分の指先が真っ白になって震えていたのを人事のようにみていた。

近づく顔、そして流れるようにキス。

少し熱いお茶を口移しでされて、マカはソウルの舌に自分の舌を絡ませる。

自分の体が彼に従順に動くのを、自分の体ではないかのように感じた。

指先の震えは止まらない。

捨てないで、捨てないで

(嫌わないで、嫌わないで)

「煙草くさい」

そうばやいた彼に、反抗できないまま、彼女は彼に股を開いていた。言葉さえ発せないまま。

どこか人事で、自分の事だとは感じられない、心と体が切り離されたそんな心地。

自分の体を揺さぶる男を見ている。

銀髪の下ろされた髪、苦しげに歪む表情、脱いだ体に走る傷痕。

軋むソファの下では、彼女が手放したお茶がだらしなく水たまりを作っている。

時折思い出したかのように名前を呼ばれて。

噛むようなキスをして、首に噛み痕、なんて自分らに似合わない扇情的な仕草。

彼女がのけぞる、快感に声を漏らす。

「ビッチ」

ソウルがゆっくりと腰をすりつけてきながら、彼女の前髪をよけた。中の一番奥にすりつけてきて、胸の奥がキュウ、と締め付けられるような快感。

マカの目の端から零れて跡の残した涙の線を、彼は口づける。

「汚い女、体目当ての男にしか好かれねえ」

酷い事を言っひどて心ザクザクと刻んで、けれど指先は優しく撫でて。

「お前なんて誰も愛さないよ」

酷い、酷い、酷い。

「でも、俺はお前が好きだ」

そう言った言葉が優しく、撫でる手が恋しくて、マカは一粒涙を零す。

「す、てないで」舌つ足らずの言葉、目を開いて、涙は垂れ流したまま、彼女は彼を見つめて。

「捨てないで、やだ、やだ、ソウル、やだ」  
「ならどうすりゃいいか、わかるか」

彼女は目の前の体にしがみついて、足を巻きつかせた。  
捨てないで捨てないで、そう壊れたように繰り返して、懇願し

て、涙を流して。なんて醜い女、マカは分かっていた、けれどこうでもしなければ目の前の男は去ってしまうから彼女はこうするしかなくて、醜態をさらす。捨てないで、捨てないで。

「やなの、捨てないで、こあいよ、やあよッ」

「俺の事、愛してる？」

「うんッ愛してる、愛してる、」

「他の男に、もう近寄らない？」

「ソウルが言うならもう近寄らない、だから、ね、ね？」

せがむようなキスをマカは彼の首に繰り返す。  
抱きついた熱を手離したら、さびしさで死ぬんじゃないかって思っ  
て。

「いっい」

そして、ソウルが懇願する女に優しい啄ついばむようなキスをする。

馬鹿な女は気づかない。

床で零れた水たまりが毒沼だと言っこと。

そして目の前で愛を囁く男が黒い悦びに浸っていることとも。



知ってても、どうしてもよかった。

唯快樂に浸って、頭をからっぽにできれば彼女は幸せだった。

そしてソウルなこの哀れな少女を、心の底から愛している。

だから夕チが悪い。

彼を貪欲につかむ手を引きよせて、欲しがるキスを与える。彼は幸せだった。

Morphine (ソウマカ) (後書き)

マカちゃん大好きなんですよ…。

でも書きたかっただけなんです…ゆ、ゆるして…！  
o  
r  
z

刀語： 墨の水滴（七×咎）

蝉の抜け殻 枯れる花 落ちた椿 転がる私

全て掬いあげて  
揺らぐ風に髪を遊ばせ  
私に振り向く貴方

ほほ笑んでいる わかっている

其れ、と指差した先は幼子が落とした団子の串だった。  
彼の、もう前から変わらず光のささない座った目がそれをシン、と  
見つめていた。

風がそよぐ、酷く熱い夏だ、よくもまあここまで来たことだ。  
その男のくせに華奢な成りをした綺麗な形の、なのに傷の跡がうつ

すらと見える指先が指差す。

ソレ、とまた呟く。

「俺、」

とも呟く。

否定姫はそう、と聞いてあいわかった、と心の中で納得していた。  
落ちた、もう用済みのそれはもうすぐ蟻が集るであろうそれは、彼  
自身を物語るのだ。

嗚呼なんの話をしていたのかしら、  
そうね、とうにしなくなった昔話を貴方はぼつりぼつりと珍しく語  
って

私はそれを珍しい珍しいと冷やかしていたのよ

貴方、それを宝箱に大事に大事に閉まったように出さないものだから  
私は少しはこれでも気を使って最近をよく勤めていたの

なのに七花くんときたらある日零れたようにぼろりと言ったものだ  
から

私は大層驚いたの、で、なんでその話になったのかしらね、

「とがめの居なくなつた俺はあれだ」

「随分とまあ細いのねえ、でも違うんじゃないの」

私は否定する。

「いや、俺だ」

けれど彼は意外と意固地だ。

「とがめの居ない俺はあんなもんだ、」

そう言つて、自分が食べていたその団子の串を串置きに刺す。  
主役のいない団子の串、食べたなら終わりの哀れな黒子。

彼はそれをなんとも思わない風に言う。実のところ、何とも思つていないのだろう。

「俺は時折白昼夢を見る」

ふいに話を変えて

「とがめと未だ一緒に旅をしている、」

そういう顔でさえ、ひとつも変わらないのだ。口の端のひとつさえ、そのままなのだ。

団子屋にまた新しい客が入ってきたのだろう、威勢のいいおかみさんの声が響いた。

風がそよいで、道沿いの木々が揺れて、ザア、と音がしたかと思うと道に落ちていた木漏れ日が忙しく形を変える。

甘い香りと夏の充満する青臭い香りが風で消されてはまた香る。

髪が風でそよいだ、頭に着けたお面が、かざりと音をたてた。…嗚呼。

景色はこうも変わるといふのに、目の前の男は停滞する。

「それが、振り向く瞬間に現実が墨を落とす。そして俺は今に引きずり出される」

沈滞して、濁っていく、川の端の濁り水と同じだ。

まだ串を見ているが、本当に見えているのは串なのだろうか、

つ、と串をつかむとそれを元の串置きに戻す。その流れを見つめていた。

彼の手は、人を切り裂くのに利口で、なるほど、それらしく、悲し

いと思う程に綺麗だった

そうと思えば、せつないものだった。

目の前の、まだ蒼青しい葉が一枚落ちた。

「会いたいののに、理由がなければ死ねない俺をお前は嗤うか？」

彼がこちらに視線をやる。

相変わらずなんてつまらない眼をした人なんだろうか。

七花くん、彼女はほほ笑む

「夢に生きたのにそれを潰された亡骸の私を嗤うなら私は貴方を嗤うわ」

そうと言えば、あんたも同じものか、と随分な事を言う。

「俺も亡骸だ、」

そう呟いた彼は酷く納得した顔をしていた。





刀語・残党（七×咎）

「何もできないよ、」

Title : 残党<sup>ザントウ</sup>

「 見ろ、なんて綺麗な桜だ、  
」

彼女が指をさす先は、薄いピンクを重ねた桜の木々が連なる桜並木。

降り注ぐ花びらがまるでシャワーフラワーのように道に零れていき、鮮やかな景色を淡くしていく、まるで夢の世界のような中を彼女は気取って歩いていく。

まだ長かった髪が左右に揺れて髪に流されている。

つい、とばかりに手を伸ばして触れてみれば確かに慣れた手触りが手の中をすりりと抜けていく。

自分のその仕草に彼女は振り返り、「私を見たいのも分かるが桜を見る、滅多に見れぬぞ、」と笑って茶化した。

抜けていった感触は、艶やかで手の中で跳ねていた

桜色した頬に白い髪、白い肌が桜の景色に混ざっていた

ただ艶やかな彼女の服を頼りに付いて行った

「地図を…」

自分が呟いた言葉はしつかりと聞こえた、彼女にも、自分にも。

彼女がなんだとばかりに振り向く、水色の空にピンク色の背景に、白い貴方、浮出る艶あでやかな袖をただ絡み取った。

「…地図を作りたいんだろ、」

「ああそうだな、この日本中を渡り歩いて。私は得意なのだよ、そうだったものが」

自分の決めつける言葉がいやだった。

くるりと彼女が回る、手にしていた袖がまたするりと通り抜けていく。

「作らなきゃ、」

何を言っているのだろう、確かな考えなどなかった。

ただ手を伸ばし彼女の髪に触れようとするがするりとつかまらない。それがじれったく、心臓が静かにドクドクと鳴り始める程焦り始める。

押しつけるように吐き捨てた言葉を彼女は微笑んで律儀に拾ってくれる、「そうだなあ、」と、自分が

無駄だと思っていたものさえ彼女は大事だと拾う、そんな女だった。

ズキリと頬が痛んだ、まだ何もないはずの頬に手で触れようとした。

けれどその手を先にと彼女が掴んでそのまま手を握ってずんずんと歩いていく。

周りを花弁が通って行った、木々が風景が後ろへと歩いていく。彼女の髪が揺れるのをただジ、と見つめていた。

欲しい、と思った。ふいにその髪が。

結ばれていない手を伸ばす、彼女が振り返る。黒い、前を見据えていた目が自分を射抜いた。

「作らなきゃ、」

「何を」

「地図を」

「なぜ」

埒が明かない言葉を掛け合って、お互い一步も引かずに同じことを言いながら、何度も繰り返す桜並木を歩いていく。

強い風が吹いた、桜吹雪だ、視界を桜が埋め尽くして、白もピンクもわからなくなつて、けれどなんとか彼女の派手な服が視界を掠めて。

手を掴んでいる感触をただ頼りに。

「俺は、」

「しち、」

か、という言葉を聞く前に視界が爆ぜた。  
桜吹雪が辺りに舞って一瞬だった、そうして目の前は桜も白も艶やかな服も無い…自分がきている彼女の死に装束の袖があるだけだ。

「とがめ」

・・・

言った言葉をもう捨つ女はいない。  
瞬きをした、まつ毛が震えて目を開けば青々とした桜並木が広がるだけだ。

「とがめ、」

自分のすべてだった、いやさ、全ての名を呼ぶ。

「何もできないよ、」

仕返しにあんたの言った言葉を破ってみただけど  
怒る人もいないから虚無感が増すばかりだ  
慣れないことはするもんじゃなかったって思う、

「なにもできないよ、」

全てを失くした抜け殻の自分はあるかぶって  
真似ごとばかりを繰り返している、  
けれどあんたみたいにくまなくいかない  
慣れないことはするもんじゃないうって思ってる、

「とがめ、とがめ、とがめ、…」

後ろから付いてくる女が自分をいぶかしげに呼んでいる。「七花く  
ん」、あんたを殺した女だ。

振り返る、彼女は仮面をかぶった頭を少しかしげているが、すぐに  
飽きたのか少し行った先の団子をねだる。



抜け殻の自分、とがめのまねごとをする自分、でもとがめに成りきれない。  
それが悲しいのか、何を思うのか自分でもわからないまま。この旅はきつと整理の旅になりそうだ。

否定姫が先を歩く、青々とした木々の桜並木を歩いていった。

刀語：曖昧な、（七×咎）

あれはなんだったのでせう

ある人はいひました 愛でも恋でもない

僕は思ふのです

確かにそんなものではなかった、と

痺れるような感覚もなく

ただ緩やかな心地にあり

決まり切った言の葉にのせられるような

そんなものじゃありませんから

ただ曖昧な 大切なものと思ふのです

T i t l e : 曖昧な、

しちりん、しちりん、

彼女は繰り返し付けただけのあだ名を意味もなく読んで一人満足していた。

甘ったるいようなものでもなく、大切に呼ぶでもなく、けれどただ繰り返し投げるように言われる自分の名前が彼女の鈴のような声で呼ばれるとなんだかむずがゆい思いがする。

しちりんこと七花は膝に乗せたのがめの白い頭を眺めていた。始めは彼女の書く報告書がさらさらと書かれるのを珍しく見ていたのだがだんだんと飽きて止めてしまった。

しん、と静まった部屋に遠くから騒ぐ声がするだけで、その中で彼女は物書きをしながら名前を呼ぶ。

はい、

試しに返事を返す。

良い名であろう。

彼女が自分名以外のことを言う。

そこでもうあきたのか呼ぶのをやめて筆が動く音しかしなくなる。

その音は心地よくぼうとしていればつい寝入ってしまいそうに静かで気づかなければ分からない落ち着いた音だ。

そうと目の前のがめを見遣る。

そういえばこんなにしかと人を見たことがあっただろうか。

姉とも違う小さな体。

回している腕にすっぽりとはまる、華奢で小さく障子紙とはうまく言ったものでなんと脆い存在なのだろうか。

首に力をすこしばかりかければ、あるいはひとつ殴ればすぐに終わりそうだ。

しろいうなじは細く おくれ毛が柔らかかに肌に落ちて。

白い肌は触れたら温かく柔らかく、心地が良かった。

脆い。

七花はそうとだけ思った。

繊細で、粗雑に扱ってはすぐに崩れそうで、淡くなんと脆い。

七花は首元に顔をうずめる、とがめが自分が何を考えているかわからないのだろう、「かわいい奴め、」と髪に触れる。

これは、なんて弱いひとなんだろう。

「とがめ、」

「眠いか？」

「ううん、」

「そうか、なら抱きしめておれ」

そう言ってくれるから、七花は力を少しこめて抱きしめる。

七花は、殊更とがめの扱いには注意しなければと考える。

そう、その筆をもつ細い枯れ木のような指もこの長い糸のような髪も全て、七花には失ってはいけないものであったから。

埋めた頬にとがめの心音が響いて、そつと目をとじた。

刀語・曖昧な、(七×咎)(後書き)

序盤のころのものです。こんなワンシーンあったっていいじゃない！  
あと刀語のリンク貼らせていただきました。

うーん、七×咎サイトがもっと増えてくれたらなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8232/>

---

泣いた死神(二次創作倉庫)

2011年1月17日18時11分発行